

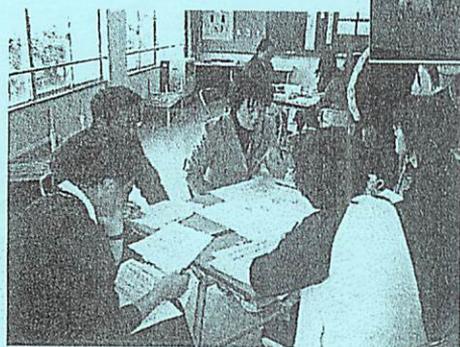
# 教育はいま

第14号

第3年次

実践的指導力の向上を目指した校内研究の活性化

—「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善を通して—



仙台市教育センター

## はじめに

仙台市教育センターでは、教職員の実践的指導力の向上を目指して、各種の研修並びに事業を実施しております。本調査研究事業は、仙台市教育委員会の基本方針や重点施策を踏まえ、主として市立学校の当面する諸課題を取り上げ、実践的な研究を通して、教育活動の改善に役立つ方策を普及・啓発することを目的としています。

今日、学校教育の在り方について、社会の各方面、保護者、地域から多種多様な期待が寄せられております。各学校では特色ある学校づくりを通して、児童生徒の基礎・基本の定着を図り「確かな学力」を育成することが求められています。これは、児童生徒が「分かる授業」「魅力ある授業」を体感することであり、私たち教師一人一人には日常の指導の充実を図りながら、実践的指導力を向上させることが必要となります。これには、各校が取り組む校内研究の一層の充実が不可欠です。昨年度末に市内各校に調査を行ったところ、校内研究では授業研究における授業検討会の工夫改善が必要であるという課題が確認されました。

このような実態を受け、今年度は、市内各校の校内研究のさらなる充実を求めて、研究主題を「実践的指導力の向上を目指した校内研究の活性化」とし、授業検討会の在り方について、研究協力校そして委嘱研究員の協力を得ながら、実践研究に取り組んでまいりました。研究の推進にあたっては、授業検討会に「授業の振り返り」を取り入れました。「授業の振り返り」はこれまで以上に、児童生徒の学びの姿とその学びの姿が意味することを重視します。問答式やワークショップ形式による「授業の振り返り」を通して、授業者自身が授業改善の方向性を語りました。また、参観の視点が共有化されることで、教師一人一人の立ち位置が変わり始め、参観者が児童生徒を見る目を育てています。本研究により、教師の学びの姿が変容することで、校内研究が活性化するという成果を確認することができました。この成果と今後の活用の視点、さらには研究主任あるいは学校経営の視点から校内研究の活性化の在り方を提案し、「教育はいま」第14号として発刊いたします。本研究紀要が、校内研究の活性化の一方策として、各校で活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今年度の教育経営調査研究事業にご指導ご協力をいただきました慶應義塾大学教職課程センター 鹿毛 雅治先生をはじめ、委嘱研究員の皆様、さらには本事業にご支援いただきました多くの方々に、心より感謝申し上げます。

平成19年3月

仙台市教育センター  
所長 吉田 利弘

第3年次

実践的指導力の向上を目指した校内研究の活性化

—「授業の振り返り」を取り入れた

授業検討会の工夫改善を通して—

■要約

本研究は、昨年度の本市小・中学校の校内研究に関する実態調査を受け、その活性化に資することを目的に、「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善をとおして、実践的指導力の向上と校内研究の活性化を目指した実践研究である。「授業の振り返り」を核とした研究としては3年次となる。

本年度は、調査研究協力校の取組を中心に、委嘱研究員と連携しながら、児童生徒の学びの事実に応じた授業検討会の工夫改善を通して、実践的指導力の向上と校内研究の活性化を図る一方策を具体的に提案している。

本研究が、今後の本市小中学校の児童生徒の「確かな学力の育成」、さらには今日求められる「教員の資質向上」につながることを期待したい。

■キーワード

実践的指導力 児童生徒の学びの姿 授業を開く 同僚性 学校経営

平成18年度 実践的指導力の向上を目指した校内研究の活性化

—「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善を通して—

目 次

■はじめに	吉田 利弘	
■研究主題・要約・キーワード		
<b>■第1部 本研究でわたしたちが目指したこと</b>		
1 主題設定の理由	渡邊 誠	7
2 基本的な考え方		
3 研究の目的		
4 研究経過		
5 今後の取組の視点		
<b>■第2部 研究協力校等の取組の実際</b> <実践編1>		
- 「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善と校内研究の活性化 -		
第1章 仙台市立田子小学校の取組	堤 由美	12
第2章 仙台市立袋原小学校の取組	滝川真智子	24
<b>■第3部 校内研究の活性化と「授業の振り返り」</b> <実践編2>		
第1章 研究主任として		
1 校内授業研究会の活性化を目指して	登嶋 紀行	33
2 校内研究の活性化と「授業の振り返り」	前田 政夫	37
3 校内研究の活性化と「授業の振り返り」	菅原 壮之	40
第2章 教科研究に取り組んで		
- 全教科・全教師による「授業の振り返り」-	横橋 雄市	45
第3章 学年主任として		
- 実際に「授業の振り返り」を経験して -	千葉 春枝	47
<b>■第4部 実践的指導力の向上と「授業の振り返り」</b> <実践編3>		
第1章 研修会における取組を通して		
- プロンプターの役割と参観者のかかわり -	熊谷 裕行	53
第2章 校内における日常的な実践		
- 校内における「授業の振り返り」の実践から -	伊藤 美穂	56
<b>■第5部 学校経営と実践的指導力の向上</b>		
第1章 小学校の取組（調査研究協力校として）		
- 学校経営と実践的指導力の向上 -	堀越 清治	61
第2章 中学校の取組		
- 学校経営と実践的指導力の向上 -	菅原 敏彦	63
第3章 学校経営の取組		
- 校内研究の活性化と学校経営の視点から -	渡部 力	67
おわりに 児童生徒を「見る目」を育てる「授業の振り返り」	渡部 力	75
■引用・参考文献, 教育経営A調査研究委員会		79

# 第1部

## 本研究でわたしたちが目指したこと

---

- 1 主題設定の理由
  - 2 基本的な考え方
  - 3 研究の目的
  - 4 研究経過
  - 5 研究の成果と今後の取組の視点
-

## 第1部

# 本研究でわたしたちが目指したこと

## 1 主題設定の理由

### (1) 今、教員に求められるもの

今日の社会の大きな変動の中で、保護者・地域をはじめ社会全体から学校教育に対する期待が高まっている。

折しも、平成18年7月の中央教育審議会の答申では「教員養成・免許制度改革の基本的な考え方」が提起された。この中の「教員をめぐる現状」として「教員の多忙化と同僚性の希薄化」が挙げられている。具体的には、「多くの業務を抱える中で、日々子どもと接しその人格形成に関わっていくという使命を果たすことに専念できず、多忙感を抱いたり、ストレスを感じる者が少なくない。」とされ、「本来の職務を遂行するためには、教員間の学び合いや支え合い、協働することが重要である」と述べられている。

また、平成17年12月の中教審「新しい時代の義務教育を創造する」の答申では、あるべき教師像として、(1)教職に対する強い情熱、(2)教育の専門家としての確かな力量、(3)総合的な人間力が挙げられた。

今日、教育を取り巻く社会状況は急速に変化し、学校教育の課題も多様化している。また、社会の教員に対する信頼の揺らぎを背景に、教員の資質能力を問い直す動きが顕著となってきている。

### (2) 教員の資質の向上

学校そして教師への信頼は、児童生徒に「確かな学力を育成する」という観点からは、教師が日常の教育活動において学習指導を中核

に「指導の充実」を図ることであり、これは取りも直さず児童生徒が「分かる授業」・「魅力ある授業」を体感することと言える。

児童生徒のこのような「学び」の成立には、専門職としての教師の「確かな力量」の形成が不可欠であることは言うまでもない。本市「学校教育推進の指針」の確かな学力の推進に関する視点「教員の資質を向上させる取組」では、授業力・指導力の向上が掲げられている。これは、例えば児童生徒理解、生徒指導力、集団指導力、学級経営力、学習指導・授業づくりの力などととらえることができる。いわゆる「実践的指導力」の向上が今日、教師の資質に求められる大切な要素となっている。

### (3) 市内小中学校の校内研究の現状

平成17年度末の本市の小中学校における校内研究推進上の課題に関する実態調査の概略(H17「研究推進協議会資料」)は以下のとおりである。

#### 【小学校】

- ・校内研究主題と研究テーマとの整合性が不十分である。
- ・個人研究では取組に温度差がある。
- ・研究教科に偏りが見られ、授業研究の在り方(特に授業検討会)についての工夫改善が進んでいない。

#### 【中学校】

- ・年間をとおした計画的な取組が不十分で授業研究が少ない。
- ・授業研究で他教科による参観はあるが、研究協議が不十分である。

・特に授業後の授業検討会の工夫改善が進んでいない。

以上、昨年度の調査結果からは、校内研究推進上の課題の一つとして「授業検討会の工夫改善」の必要性が、校種を越えて浮かび上がっている。

専門職である教員には不断の研修を通じた「実践的指導力」の形成が不可欠である。中教審の答申を引用すれば、「教員間の学び合いや支え合い」を基盤とした「校内研究の活性化」が、本市各学校における教師の「実践的指導力」の向上にとって大切な要因であり喫緊の課題となっている。

## 2 基本的な考え方

### (1) 校内研究の活性化

既述の実態調査からは、市内各校の校内研究が十分に活性化していない現状がうかがえる。このような背景には、職務の多忙化と相まって、校内研究の取組が、個々の教師にとって必要感や切実感をともなうものではなくなっていることが考えられる。

校内研究の活性化を考えると、日々の授業において、一人一人の教師が自らの授業改善を意識し、校内研究において他から学ぶ姿勢が不可欠である。そこで、本研究において、校内研究が活性化していると言える「教師の学びの姿」を、以下の4点ととらえた。

#### ① 教員の学び合いの成立

教師一人一人が研究そのものを、自らとのかかわりでとらえている。

#### ② 同僚性の構築

教師一人一人が日常の実践を通して、児童生徒の「学びの姿や事実」を基盤に、指導上の課題や悩みを共有しながら、相互の信頼関係を構築している。なお、活性化にあたって

は、学校経営の視点から管理職のかかわりも大きなものがあると考えられる。これについては、本誌第5部で取り上げる。

### ③ 日常的、継続的な研究の取組

授業研究がイベント的ではなく、指導案の工夫をもとに教師がともに日常的に授業を開き、相互に学び合い高め合う取組が展開している。

### ④ 「児童生徒の学び」を重視した授業検討会の工夫改善

「授業の振り返り」を取り入れ、児童生徒の学びの姿とその意味を協議することで、授業者自身が指導の在り方、工夫改善の視点について気付きを獲得している。

#### (2) これまでの調査研究から

##### 【平成16年度】

研究主題：「指導計画改善のために授業の振り返りを取り入れた授業評価の考え方と進め方」

研究概要：委嘱研究員が、学級活動と総合的な学習の時間の実践で支援者とともに「授業の振り返り」を取り入れた授業評価を実践した。

研究成果：授業者と支援者、複数の参観者による「授業の振り返り」を通して児童生徒の学びの姿をもとにした様々な視点からの授業評価が可能となり、授業者の気付きが得られた。学び・高め合う教師集団が形成され、指導計画の修正・改善が図られるなど、教師自らが指導力を高めようとする変化が見られるようになった（平成16年度 教育センター教育研究紀要「教育はいま」第12号）。

##### 【平成17年度】

研究主題：「授業評価を生かしたカリキュラムの改善～授業リフレクションによる実践を通して～」

研究概要：委嘱研究員が、小・中国語科の

実践でプロンプター（\*司会者または支援者とも称される。本稿では以下、司会者とする）と行う「授業リフレクション」を実践し、授業評価を生かしたカリキュラム改善を実践した。

**研究成果：**授業者が司会者、参観者とともに行う「授業リフレクション」を通して、児童生徒の学びの姿をもとにした様々な視点からの授業評価とカリキュラム改善が可能となった。また、セルフリフレクションによって、授業者自身が自らの授業改善の方策を意味付けることができた。さらに集団によるフリーカード法では、参観者が授業や児童生徒の学びについて多様な視点を共有することで、授業者とともに授業改善の手掛かりを得ることができた（平成 17 年度教育センター教育研究紀要「教育はいま」第 13 号）。

以上の取組を踏まえ、本年度は「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善を通して、「教師の実践的指導力の向上を目指した校内研究の活性化」を研究主題とした。

「授業の振り返り」には、リフレクションシートをもとに授業者が主に司会者で行う問答式（対話型、主に 16～18 年度）、カードをもとに授業者・司会者・参観者が多様な授業の見方や感じ方を共有するフリーカード法（主に 17 年度）の他、グループを編成し、児童生徒の学びの姿を記録したカードをもとに、話し合いの視点にそって司会者が協議を進めるワークショップ形式（主に 18 年度）等、様々な方法がある。

平成 16 度から 3 年目となる今年度の研究では、このような多様な「授業の振り返り」の形態を授業検討会に取り入れ、児童生徒の学びの姿に視点をあてた日常的・継続的な授業研究の実践により、校内研究の活性化を図り、教師一人一人の実践的指導力の向上を目

指すことが本研究の趣旨である。

### (3) 「授業の振り返り」

「授業の振り返り」とは、広義には教師が自らの授業を振り返る授業研究の総称である。「授業の振り返り」は、司会者が参観者とともに、授業者自身の振り返りを促す機会を意図的に設けるものである。これまでの授業検討会では、対象とする授業内容と乖離した視点から指導方法や教材解釈を論じる傾向にあった。このため、必ずしも授業者自身が明日からの指導の方向性を得たり、指導に関する意欲をかき立てられるものではなかった。このことは、既述の実態調査からも明らかであり、より多くの教師が、明日からの指導に結び付く研究協議を求めているとも言える。

「授業の振り返り」では、授業中に教師とのかかわりで起きている「児童生徒の学びの姿」を大切にす。なぜならば、日々の指導において、教師は児童生徒一人一人の「学びの事実」をすべて見取ることは現実には難しいからである。そこで、参観者が得た授業中の児童生徒の学びの姿を研究協議の中で明らかにする。これにより、授業者自身が司会者、参観者とともに、学びの姿の意味を授業中の自らの思考をもとに冷静に振り返っていくことが可能となるのである。

「授業の振り返り」は、最終的に授業者が自らの気づきをもとに、授業を振り返り、指導にあたっての工夫改善の視点を獲得する授業検討会である。

司会者と参観者は授業者である教師自身の「思い」や「願い」、そして本時の授業における「児童生徒の学びの姿や事実」を共有している。このため、研究協議では参観者の所属学年や専門教科などの壁は必要とはされず、共に教師として「児童生徒を見る目」が

求められることになる。

今年度、ある中学校の社会科の授業研究の後にワークショップ形式の授業検討会を実施した。少人数による研究協議であったが、検討会終了時にある教科の男性教諭が「教科が違って専門外でも、生徒の学びを語ることが出来るんですね」と発言した。まさに、「授業の振り返り」が教師の同僚性を生み出した場面である。

「授業の振り返り」は、授業検討会における協議の視点が、児童生徒の学習活動となることで、教師一人一人の「児童生徒を見る目」を磨くことになる。児童生徒の学びが見えることは、教師の実践的指導力の向上と不可分ではない。

#### (4) 研究協力校等との連携

昨年度までの本研究は、委嘱研究員による本校での実践研究を中心としている。研究3年目を迎える今年度は研究協力校等との連携を中心とした実践研究を基本としたが、連携にあたっては特に以下の点に留意した。

・平成18年度 調査研究協力校  
 仙台市立田子小学校  
 校長 堀越清治(委嘱研究員)  
 研究主任 堤 由美(委嘱研究員)  
 (平成18年度 教育経営A長期研修員)  
 研究教科 国語科

・仙台市立袋原小学校  
 校長 大沼 敏幸  
 研究主任 滝川真智子(委嘱研究員)  
 (平成18年度 教育経営A長期研修員)  
 研究教科 国語科・理科・生活科

#### ① 主体性の尊重

上記の2校が委嘱研修員の本籍校である。本研究では、上記の協力校等の要望に応えながら校内研究を支援する立場をとり、具体的

な研究実践の中で授業検討会や校内研修を中心に研究実践を行った。

#### ② 長期研修員の役割

長期研修員は委嘱研究員として調査研究委員会に所属する。また、自校の校内研究を推進し、研究体制の構築や研究計画の策定にあたる。

#### ③ 委嘱研究員等の役割

委嘱研究員は協力校等の校内研究に可能な範囲でかわり、「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善、校内研究の活性化について実践的に研究する。また、所属校において、本調査研究との関連を図った取組を校務分掌にそって実践する。

### 3 研究の目的

市内各校の校内研究に関する実態調査を踏まえ、実践的指導力の向上を図る校内研究の活性化の在り方を「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善を通して実践的に探り、その方策の有効性と課題を提案する。

### 4 研究経過

今年度は、校内研究の活性化を図るために、長期研修員(田子小学校・袋原小学校)さらには委嘱研究員との連携を中心に研究を推進した。以下にその概要を記述する。

#### (1) 田子小学校

学力向上推進協力校で、昨年度から校内研究の活性化に視点を置いた取組を実践してきた。本年度は調査研究協力校となり、「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会をはじめ、特に研究の日常化に取り組んできた。研究計画の推進に委嘱研究員がかかわり、随時支援を行った。校内研究の具体については、第2部第1章を参照していただきたい。

(2) 袋原小学校

長期研修員の原籍校である袋原小学校において、校内研究の課題(研究の視点や方向性)の解決、研究計画の立案や授業研究の推進に向け、随時情報交換を行いながら支援を行った。特に、校内研究の活性化の視点では、「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善を支援した。校内研究の具体については、第2部第2章を参照していただきたい。

月 日	研究の主な内容	会 場
H18. 5. 9	◇ 委嘱状交付式 ◆ 第1回調査研究委員会	教育センター
5. 24	◇ 校内研修 「授業の振り返り研修会Ⅰ」	田子小学校
6. 19	◇ 校内研修 「授業の振り返りについて」(講話)	袋原小学校
6. 27	◆ 第2回調査研究委員会 研究報告, 協力校訪問について	教育センター
7. 18	◆ 第3回調査研究委員会 ○ 授業研究 2学年「国語」 … ワークショップ形式の授業検討会 ○ 授業研究 3.5学年「国語」 … 問答式の授業検討会 ○ 鹿毛教授講演 「校内研究の活性化と授業の振り返り」	田子小学校  鹿毛教授講演
7. 19	◇ 校内研究 ○ 授業研究 6学年「国語」, … 問答式の授業検討会	袋原小学校  授業風景
8. 29	◆ 第4回調査研究委員会 研究紀要執筆分担, 研修視察報告	教育センター
9. 21	◇ 校内研修 「授業の振り返り」 ○ 授業研究 5学年「保健体育」 … カード構造化法による授業検討会	袋原小学校
9. 26	◆ 第5回調査研究委員会 研究報告, 田子小学校公開について	教育センター
10. 5	◇ 校内研修 9.21の続き	袋原小学校
10. 13	◇ 校内研修 「授業の振り返り研修会Ⅱ」	田子小学校
10. 25	◆ 第6回調査研究委員会 学力向上推進協力校 田子小学校公開研究会	田子小学校 (公開研究会)

○ 授業研究 1.4学年「国語」… 問答式の授業検討会



(1学年司会) 委嘱研究員



(4学年司会) 委嘱研究員

○ 授業研究 2学年「国語」… ワークショップ形式の授業検討会



(2学年司会) 田子小学校 教諭

○ 授業研究 3.5.6学年「国語」… 問答式の授業検討会



(3.5.6学年司会) 田子小学校教諭

	11.28	◆ 第7回調査研究委員会	研究紀要執筆について	教育センター
	12.25	◆ 第8回調査研究委員会	紀要原稿読み合わせ I	教育センター
H19	1.10	◇ 長期研修員研修	「カード構造化法」	教育センター
	1.18	◆ 第9回調査研究委員会	調査研究発表会, 紀要原稿読み合わせ II,	教育センター
	2.8	◆ 第10回調査研究委員会	調査研究発表会	教育センター

## 5 研究の成果と今後の取組の視点

### (1) はじめに

「実践的指導力の向上を目指す校内研究の活性化」という主題の下、今年度は「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善を具体的な視点として、協力校等とともに研究に取り組んできた。

協力校等の具体の取組と成果、課題については第2部に譲るが、ここでは研究から得られた基本的な考え方と今後の取組の視点について触れておきたい。

### (2) 基本的な考え方

児童生徒の学びの姿を大切にする「授業の振り返り」にはさまざまな形態がある。今、3年間の研究を振り返り、この取組から得られた基本的な考え方を整理すると、大きく以下の2点にまとめることができる。

#### ① 自らとの語り合い

教師は日常の指導において、児童生徒一人一人にどのような学びが成立しているかを見取ることが必要である。「授業の振り返り」では、司会者や参観者によって提示された児童生徒の学びの姿を吟味する。この時、授業者は、その学びの事実の意味を自らの指導と関連付けて振り返ることが求められる。この時に得られる授業者の「気づき」が、授業改善の方向性を語ることにつながる。自らの指導を写す鏡であるとも言われる児童生徒の学びの姿は、日々の指導を振り返り、実践的指導力を向上させる一つの重要な視点である。

#### ② 同僚性を育む授業検討会

「授業の振り返り」では、授業検討会に臨む教師一人一人が、児童生徒の学びを「見る目」を問われることになる。しかし、教師には個人差があるのも事実である。司会者による協議で、授業のポイントと学びの意味が再

現される時、教師の「学びの姿を見る目」が鍛えられている。参観の立ち位置を変え、その意味を探ろうとする姿は、授業研究を常に自らにあてはめることで、学び続ける教師を育てている。

#### (3) 今後の取組にあたって

本研究で取り組んできた「授業の振り返り」による授業検討会の工夫改善にあたって、今後の活用の視点をまとめてみたい。

##### ① 「問答式」

司会者と授業者によって行われる時系列に沿った「授業の振り返り」である。検討会の協議の軸は、司会者、参観者によって明らかにされる児童生徒の学びの姿である。司会者は事前に授業者の思いや願いを把握すること、注目する児童生徒をピックアップしておくなど、授業者に寄り添う姿勢が求められる。また、学びの姿からその意味を解釈して提示する場面を創り出し、授業者の振り返りを促す必要がある。

##### ② 「ワークショップ形式」

参観者がグループに分かれ、拡大した指導過程に付箋紙に記録した児童生徒の学びの姿を貼付していく。これを基に、研究の視点や本時のねらいと関連付けたグループ協議が展開する。司会者はグループ協議の内容の共有化のほか、その後の全体協議が焦点化するように、話し合いの視点を設定、明示する必要がある。

以上、「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善を通じた本研究が、校内研究の活性化と実践的指導力の向上の視点から、市内各学校の実情に合わせて活用されれば幸いである。

## 第2部

### 研究協力校等の取組の実際

#### <実践編 1>

#### 「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の 工夫改善と校内研究の活性化

---

#### 第1章 仙台市立田子小学校の取組

長期研修員 堤 由美

#### 第2章 仙台市立袋原小学校の取組

長期研修員 滝川真智子

---

## ◇第1章◇ 田子小学校（研究協力校）の取組

# 「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会 の工夫改善と校内研究の活性化

### 1 校内研究を活性化するための三つの取組

#### (1) 一人一回の授業研究

研究を自分の事としてとらえ、そこに参加する意義と必要性を見出すために、まず、自分で授業研究をしてみることが肝要である。そこから見えてくる問題点や改善すべき点に自ら気づき、それを認め、次のステップに進んでいく意識をもつことが大切である。

さらに、自分たちの研究に対する考えを深めていくためには、全員が授業を公開する土壌をはぐくんでいかなければならない。そこで本校では、全員授業の必要性を共通理解した上で、平成16年度まで年間3回であった全校授業を、17年度から一人一回授業研究を行い「教室を開く」ことにした。

#### (2) 指導案の見直し

本校は、平成17年度の4月から仙台市教育委員会委嘱「学力向上推進協力校」として児童の学力向上に取り組んできた。

そして、7月の学習指導訪問に照準を当て、次のような試みを実施した。

それは、授業研究を行い実践を積み重ねていく上で、最も時間と労力を費やしていた指導案作成にかかる時間の軽減を図るため、指導案の形式を簡略化することだった。授業以前にたくさんの時間をかけるより、本時の授業を第一に考えたいという本校の教師の願いからである。

具体的には、「授業構想案」の様式をA4版

1枚に収めることとして実践を開始した。「授業構想案」とは、教材観・児童観・指導観を盛り込み、授業に対する教師の思いや願いを大切にし、本時の指導に視点を当てた略案である。この試みにより指導案作成にかかる時間はかなり軽減された。

しかし、A4版1枚の構想案の中にまとめるためには、従来以上の教材研究や児童の実態の把握、言葉の吟味が必要とされた。そして、このことは後に教師の児童の実態をとらえる力に結びついていった。

平成17年度の初めは、この構想案一枚で授業研究がスタートした。その後、7月の学習指導訪問を経て、単元における本時の位置付けが分からないとの反省が出された。

そこでA4版1枚の単元の指導計画を構想案に加える形とした。その結果、単元における本時の位置付けが明確になった。

さらに、授業研究の日常化を図るため、学習指導訪問や校内授業研究日以外の普段の授業公開においては、簡略化した指導案を用いることとした。

#### (3) 授業検討会の見直し

もう一つ、これまでの校内研究で問題となっていたことに、授業検討会がある。授業研究は、本時の一時間のために多くの時間をかけて準備が進められる。ところが、これまでの授業検討会では、参観者の視点に基づく指導法に関する意見を授業者が提示されることが多く、それまで準備してきた本時の授業内

容と大きくずれることもあった。授業者の思いや考えとは別の視点の話や、参観者の感想で終わることもあった。授業者として次時の授業へ意欲をもつ検討会につながらない場合もあったととらえる。

このような反省を基に、授業検討会の在り方を見直し、授業者が次の授業へ向けた改善点に自ら気づき、意欲をもってその後の授業を行っていくような体制を整えることが大切であると考えた。

校内研究を活性化させるためには、校内で多くの授業研究が行われる必要がある。検討会に参加し、自分も授業研究を行おうとする心構えを作るために、「やって良かった」と思えるような授業検討会を設定することは、意味のあることだと考えた。

以上のことを踏まえ、本校では授業検討会の改善の視点を、児童の実態や授業者の思いや願いからかい離することなく、本時のねらいなどに沿って授業を振り返り、改善すべき点について授業者自らが気づくような協議とし、「授業の振り返り」を導入した。

「授業の振り返り」は、これまでの検討会に見られる、授業者の「自評」から始まり、本時の授業における教師側の指導法や参観者の視点からの発言に偏る流れとは、多少異なる部分がある。それは、授業者の授業作りに対する思いや願いを大切にするという点である。

「授業の振り返り」の形では、参加者がまず授業者の提案を受けとめた上で、児童の学びの姿を中心に協議し、最終的に授業者自身に気づきを促すことをねらいとしている。このことは授業者の教師としての力量形成に影響を与え、その後の指導力向上に結びつくものととらえる。

また、日々多くの実践が現場で繰り返され

ている中で、数時間の授業研究のこののみを取り上げて論じ合うことよりも、日々教室で繰り返される授業内容の改善へ向けた視点をもつことが重要だと考える。

実践として平成17年度の当初は、授業検討会の時間を二つに分けた。まず、授業検討会の前半を「授業の振り返り（問答式）」の形態で行い、後半を従来型の研究の視点に焦点化した話合いとした。

これは、これまでの検討会における「研究の視点と本時の授業との関連」の項目が、検討会から無くなることに対する教師の不安を、最小限にとどめることに配慮した手だてである。この二つに分けた検討会を実施する中で、「授業の振り返り」の部分で授業全体に関することが的確に話し合われており、これまでの授業検討会を加える必要がないのではないかという意見が出されるようになった。「授業の振り返り」のよさに教師が気づいた段階であると考えた。

次に12月の初めに「授業の振り返り研修会」を設定した。一つの授業を全職員で参観し、「授業の振り返り」の検討会を実施してその実際を体験することにより研修を深めた。

研修会を通して、授業者が自分の授業に対する思いや願いを語るができる点が認められ、校内で受け入れられるきっかけとなった。

「授業の振り返り」の印象については、「自分の授業のことを、これまでこんなに丁寧に話したことがあっただ



「授業の振り返り」研修会

ろうか。」という声が聞かれた。この「授業の振り返り」を

終えた印象とその意義が、授業研究を行い「授業を開く」ことに結びついた。

## 2 調査研究協力校として

### (1) 17年度の取組を踏まえて

本校は今年度、仙台市教育センターの調査研究協力校として「校内研究の活性化」に取り組むことになった。

これまで取り組んできた内容のよさをさらに生かすような取組を考える必要があった。

そこでまず、授業構想案の内容の見直しを行った。授業構想案の中に、これまではA4版1枚にまとめていた単元の指導計画を加えた。さらに、本時のより明確な流れを参観する側が把握できるように、簡単な指導過程にあたる「構想メモ」を加え活用することにした。

また、授業研究と共に、これまで「授業の振り返り」の研修会と実践を積み重ねてきた（※資料）。その中で「司会」の役割を、次第に本校の教師が担当するようになってきた。「司会」が授業者にどう問い掛け、何を引き出し、どのような気付きをもたらせるかを研修と実践の中から試行錯誤して各自がつかみ、実践に結びついたと考えられる。

### (2) 取組の実際

#### ① 学習指導訪問

7月には、3回の学習指導訪問を行った。3回目の18日は、第3回調査研究委員会を本校で開催した。低・中・高学年部において国語科の「話すこと・聞くこと」の領域で「自分の思いや考えをもって、伝え合うことのできる子どもの育成」というテーマに向け授業研究を行った。当日は、慶應義塾大学の鹿毛雅治教授に来校いただき、3学年の「道あないをしよう」の参観、その後の授業検討会に参加いただいた。「授業の振り返り」では、

他の教師と同じ視点に立って、児童の学びの姿や事実を語られた。この時には、「授業の振り返り」で求める参観者の発言のモデルを示していただいた。当日の開催した講演の要旨は、以下の通りである。

- 1 本校のリフレクションを参観して
  - (1) プロンプターが自校化されつつある。
  - (2) 授業における児童の学びの姿が浮き彫りになっている。
- 2 国語科の研究について
  - (1) 「話すこと・聞くこと」の研究が話を引き出すプロンプターと重なる。
  - (2) 「聞く」態度の重要性を感じる。
- 3 自然体の校内研について
  - (1) 実践において、よりよいものを探し続ける視点と意識が大切である。
  - (2) 授業者が得をする校内研究の体制作りが必要である。
- 4 「学校力」について
  - (1) 学び合う教師集団であること。
  - (2) 授業研究を実践と結び付ける体制作りが必要である。
- 5 さらなる「学校力」をめざして
  - (1) 教師の有能さ（実践に満足できるか）
  - (2) 自立性（自ら授業改善を行っているか）
  - (3) 関係性（互いに学び合い高め合っているか）



鹿毛雅治教授の講演  
「校内研究の活性化と  
授業の振り返りに  
ついて」

当日の中学年部の授業者は、教職20年経過の教師であり、「司会」が教職9年目の教師であった。そうした中で、「振り返り」が行えたことは、日頃の職員間のつながりが「授業の振り返り」に大きく関与していると考えられる。

② 公開研究会

10月25日の公開研究会では、1～6学年において国語科の「話こと・聞くこと」の授業が行われ、特別支援学級では、生活単元学習の授業が行われた。

授業検討会は、2学年以外の学年が、「問答式」の「授業の振り返り」であった。授業者は、授業後に自分自身で授業を振り返ったことについて「振り返りシート」に記入した。それをもとに「司会」が授業者に授業における児童の学びの姿を通して「授業の振り返り」の話合いを進めた。

「司会」は、3学年、5学年、6学年、特別支援学級は本校の教師が行った。「司会」を務めた教師は、これまでの実践と研修で体得したものを生かし、参観者からの発言も交えて検討会を運営した。

4学年は、調査研究委員会委員長が務め、1学年は、調査研究委員の教師が行った。

2学年は、「ワークショップ形式」の振り返りを行った。参観者は、各グループの司会者を中心に授業における児童の学びの姿について、本時の課題を中心に話を進めた。

各学年の「授業の振り返り」では、授業における課題について、「司会」を中心に児童の学びの姿や事実に焦点を当て話し合う姿が見られた。そこで、授業者が、授業における事実を司会者や参観者からの話を聞くことで様々な気づきを得る場面が見られた。

「授業の振り返り」において、自分たちが



取り組んできた結果を、児童の学びの姿を通して見取るとは、教師にとっては

「授業の振り返り」大きな励みとなり、また、課題を知ることは、授業改善の方向性を

獲得する機会になるととらえる。さらに、共同での学びを通し、教師としての授業を見る目が育つことにつながると考える。

加えて、外部の講師の方々からの校内研究への指導や的確な評価は、その後の研究を進める上で影響を与える物だととらえる。

公開研究会参観者の感想より

■公開授業について

○何度か授業を見る機会があったが、そのたびに児童たちが、鍛えられているという感想をもった。「話すこと」に自信のなかった児童たちが、モデルを示し鍛えることで、自信をもって話せるように育っていた。

■授業検討会について

○「授業での児童の学びの事実を話題にした検討会」というのが分かった。学びの事実を司会者が授業者に問い掛けることで、授業者が自ら改善すべき点に気付くことができれば何よりだと思う。

3 研究主任として

研究主任として、校内研究を活性化させるためには、次の取組が必要だと考える。

まず、校内研究推進にあたっての企画、立案、連絡、調整の役である。校内研究の進み具合を常に把握し、各学年間の指導案検討会と授業研究日の日程調整が必要になる。また、校長と教師間のパイプを務めるのも研究主任の仕事になる。今年度は、職員会議での研究部からの提案や協議と「研究部だより」を活用した。また、職員室内での各学年部への声掛けと情報の収集を積極的に行った。さらに、計画に関して常に校長に報告し指導を受けた上で研究を推進した。

次に、学校全体への資料提供や、計画を提案する際のタイミングを考慮することが求め

られる。特に指導案の形式の提案や学習指導訪問の設定など教師の業務に大きく関わる内容については、配慮を必要とした。

今年度は、事前に研究推進委員に情報を提供し、職員室内での各学年部への声掛けを事前に行った上で、校内事情を考え、「研究部だより」や朝の打合わせを活用して実行に移すように心がけた。

#### 4 研究推進の現状

##### (1) 研究の日常化と「授業の振り返り」

これまで、公開研究会を終えることで、その年の研究が停滞することが多かったように思える。そこで、校内研究の活性化という視点を持ち、10月の公開をゴールとすることなく研究を継続させるため、11月の職員会議で「今後の授業研究日程表」を提示した。これにより全校授業を継続することが可能となった。その後、授業研究日程を集約し、日程調整を行った。

最初は、12月に3名の授業研究を行った。15日に行われた1学年の初任者の授業研究の検討会は、司会を拠点校初任者研修担当の教師が担当し、低学年部を中心とした「ワークショップ形式」で



進められた。この日は、二つのグループに分かれ、付せん紙に

書き込まれた内容をもとに、話し合いが進められた。本時の授業における課題を見出す過程では、児童の授業での発言やつぶやき、発問に対しての児童の受け止め方など、「児童の学びの姿」で語り合う授業検討会が進められた。それぞれのグループの記録者からの発表では、二人の教師が、話し合いの内容を受けて、

課題が授業者に伝わるように説明を行う様子が見られた。

本校における教師の子供を見る目が変わってきており、「学びの姿」だけではなく「学びの質」を見ようとする目が養われてきているととらえられる。これまでの実践の蓄積から教師が、「授業の振り返り」において何を課題とすべきか、そして、それをどのようなプロセスを経て授業者に提示し授業改善に結びつけていくのかを理解した上で、実践した場面であると考えられる。

##### (2) 「授業の振り返り」の活用にあたって

今年度の授業検討会の取組を踏まえ、本校における「授業の振り返り」の活用の視点を以下のように考えている。

「問答式」は、司会者と授業者の関わりを通して、授業者が学ぶことの多い授業検討会である。これに対し「ワークショップ形式」は、多様な児童の学びの姿が協議の材料として提供されることから、授業者に加えて、参観者も育つ「授業の振り返り」である。

上記の視点を踏まえ、「授業の振り返り」の形態を学年の構成メンバーや授業者の抱える課題に合わせて取り入れていきたい。

#### 5 調査研究協力校としての成果

##### (1) 意識の変容

本校の教師を対象に「授業の振り返り」を経験したことに関して、12月にアンケートを行った結果、「授業の振り返り」を肯定的にとらえている結果が見られた。具体的には、「じっくりと自分の授業を振り返ることができた。」という実感を多くの教師がもったことで、授業における課題を日常的に意識することにつながってきていると考えられる。ま

た、「全員による授業公開の必要性」「授業を振り返ることの大切さ」などの言葉から、その後の授業研究に対する教師の姿勢が前向きになっていることも分かる。

## (2) 同僚性の構築

研究推進の中で、授業に向けての教材研究や指導案を検討し合う教師の姿が、放課後の教室や職員室で数多く見られるようになった。これは、授業研究を通して学ぶ機会を共有化したことを通して、教師間に学び合いはぐくまれていることを示す教師の姿であった。

授業検討会において授業者の思いや願いに寄り添うためには、自分も授業者になる経験が必要である。自分自身が授業研究を行わない時に比べ、自分も必ず授業者となる場合は、教材研究も検討会も他人事では無くなる。

同僚性の構築とは、同じ研究を進め日常的に「教室を開く」経験をした者の中から生まれるものである。職員室における授業に関する会話も次第に増えていくことで、教師一人一人の児童を見る目が育ち、実践的指導力の向上につながっていると考える。

## 6 これからの課題

### (1) 二つの視点

2年間の研究を終え、校内研究に関してのアンケート調査を行った結果、校内研究をより活性化させるために二つの視点が見えた。

一つ目は、研究に対する教師の共通理解である。教師は、常に自分の実践を踏まえ、授業改善の必要性を認識することが大切である。そして、子供の学びに結びつく研究推進の意義をとらえ、指導力を高めていかなければならない。また、研究主任は、これらの意識を大切に研究を推進する必要がある。

二つ目に、「授業の振り返り」と授業改善の関連性を、実践を通して検証していくことが必要である。授業者は、「授業の振り返り」を通して得た気づきをもとに授業改善の視点や方向性を獲得する。今後は、実践における改善点が次の授業でどう生かされているのかを、学年内で見合うなど日常の振り返りを通して検証をしていくことが有効だと考える。

これらを踏まえて、教師が、校内研究を推進することに意義を見出し、児童の学力向上のために実践的指導力の向上を図っていく必要があるととらえる。

### (2) 校内研究のさらなる活性化

本来求められている児童の学びの姿とは、日々展開される授業において自分の存在が常に認められ、活躍する場があり、なおかつ授業内容を理解できることだととらえる。

本校において、「授業の振り返り」を取り入れ全員が授業研究を行ってきたことは、教師の実践的指導力の向上に結びつき、自信にもつながっている。教師を対象に行ったアンケートでは、「授業の振り返り」を取り入れたことで、「また授業をしてみたいくなった。」という意見もあった。

この2年間の実践により、教師が研究に対して前向きな姿勢になることで、児童の学びが保証され、校内研究が活性化されることが確認された。今後も本研究で得たものをさらに深めていくため、日々の授業実践を中心に実践的指導力の向上を目指していきたい。

#### 参考文献

- 「学力向上・学習評価」研修 奈須正裕編集  
 授業者の振り返りを支援する 藤沢市教育文化センター  
 「技」を磨き合える学校づくり 吉村敏之編集

〈資料1〉

表1 研修会および授業研究

仙台市立田子小学校

年・月・日	「授業の振り返り」・「国語科」研修会	月 日	授業研究
17・6 23	◆国語科研修会Ⅰ 講師 仙台市教育センター 指導主事 浅野郁子先生		
	研究校の「授業の振り返り」参観		
7 15	◆学習指導訪問 全体講評 仙台市教育センター 指導主事 浅野郁子先生 ※「授業の振り返り」+従来型検討会 司会・本校教諭	17・7 4 7:15	4学年(体育) 1・4・6学年(国語)
8 25	◆国語科研修会Ⅱ 講師 仙台市立大野田小学校 教頭 今野和賀子先生	8:30	1学年(国語)
		9 2 7 30	1学年(国語) 2学年(国語) 2学年(国語)
		10 20	4学年(体育)
11 29	◆校内授業研究 講話 仙台市立七郷小学校 校長 今野英二先生 ※「授業の振り返り」+従来型検討会 司会・本校教諭	11 22 24 29	3学年(国語) 4学年(国語) 2・3・5学年(国語)
12 15	◆授業の振り返り研修会 ※「授業の振り返り」司会 仙台市教育センター 主任指導主事 渡部力先生	12 13 15 16 20	4学年(国語) 4学年(国語) ひまわり(生活単元) 4学年(道徳)
		18・1 17 24	6学年(国語)9時間 5学年(国語) 1学年(国語)
		2:16 22	3学年(道徳) 1学年(国語)
18・5 24	◆授業の振り返り研修会Ⅰ ※「授業の振り返り」司会 仙台市立連坊小路小学校 校長 渡部力先生	5 24	4学年(国語)
6 6	◆国語科研修会 講師 仙台市教育センター 指導主事 浅野郁子先生	6	1～6学年(11教科) ひまわり(日常生活の指導)
7 10	◆学習指導訪問Ⅰ 全体講評 仙台市立七郷小学校 校長 今野英二先生 ※「授業の振り返り」司会 本校教諭	7 10	1・4・6学年(国語)
12	◆学習指導訪問Ⅱ 講師 宮城教育大学 教授 相澤秀夫先生 ※授業検討会 司会 相澤秀夫先生	12	6学年(国語)
18	◆学習指導訪問Ⅲ 講演 慶応義塾大学 教授 鹿毛雅治先生 ※2学年 「ワーショップ形式」 3・5学年 「授業の振り返り」司会・本校教諭	18	2・3・5学年(国語)
8 31	◆カリキュラム・マネジメント研修会 講師 東京学芸大学 教授 児島邦宏先生 東北大学大学院教授 小泉祥一先生	8:31	2・4学年(国語)
10 13	◆授業の振り返り研修会Ⅱ 講師 仙台市立連坊小路小学校 校長 渡部力先生		
25	◆学力向上推進協力校 公開研究会 全体講評 仙台市教育センター 主任指導主事 神谷良夫先生 ※4学年「授業の振り返り」司会 仙台市立連坊小路小学校 校長 渡部力先生 1学年「授業の振り返り」司会 仙台市立東六番丁小学校 教諭 熊谷裕行先生 2学年「カードを使った振り返り」 3・5・6学年 ひまわり1組 「授業の振り返り」司会 本校教諭	10 25	1・2・3・4・5・6学年 (国語) ひまわり(生活単元)
12:11	◆カード構造化法研修会 講師 仙台市教育センター 指導主事 渡邊誠先生	12:11	5学年(国語)
		12 2 15	2学年(学級活動) 1学年(学級活動)
19・1		19・1 12 16 18 19 24 29 30	2学年(国語) 2学年(国語) 2学年(国語) 6学年(国語) 1学年(国語) 1学年(国語) 3学年(保健 養護教諭)
		2:9	4学年(国語)

◇第2章◇ 袋原小学校の取組

「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善と校内研究の活性化

1 校内研究の課題

(1) 校内研究の現状

本校では昨年度まで、学年ごとに年1回ずつ計6回の全校授業研究会を実施してきた。この研究会では、各学年1名の教師が代表で授業公開を行い、教師全員が授業参観し、授業後の検討会が開かれた。

全校授業研究会が近づくと、授業者が考えた指導方法を確認するために、同学年に所属する他の教師が、事前に授業を行うことがあった。この事前授業は学年内で公開され、お互いに見合い、検討し、改善され、公開する授業がつくられてきた。

しかし、課題もあった。第一に、授業研究会のとらえ方である。各学年の取組の成果として授業研究会が位置づけられ、代表となる教師の授業公開が、研究のゴールになっていたことは否めない。

第二に、授業検討会の在り方である。教材観や指導方法について、感想や一般論で協議されることがあった。授業者は思いや願いを参観者に理解されないまま、課題を具体的に把握できず、協議されたことをその後の授業改善に生かし切れないことが多かった。

校内研究を活性化させるには、教師の研究に対する意識とその変容を探ることが必要と考え、校内研究の現状と改善の視点について調査を行ったところ(表1)、活性化のキーワードが浮かび上がってきた。

問1 日常の授業の課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・効果的な教材研究の方法が分からない。</li> <li>・気持ちに余裕を持って指導できない。</li> <li>・授業の質、児童の到達度への不安がある。</li> </ul>
問2 校内研究活性化のためのアイデア
<ul style="list-style-type: none"> <li>・気軽に授業を見合う。</li> <li>・普段の授業を見合う。</li> <li>・いろいろな機会に授業を公開する。</li> </ul>
問3 授業参観の視点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の発問や支援</li> <li>・指導目標との整合性</li> <li>・児童の発表の内容</li> <li>・児童の表情やしぐさ</li> </ul>

表1 校内研究の課題と活性化のためのアイデア

(H18.5.20)

これによると、日常の授業の課題は、教材研究に関することであると分かる。一方、「方法」、「余裕」、「質」など、一人一人の教師が、よりよい授業を求めていることが分かった。

また、校内研究の活性化のためには、授業公開が必要であると考え教師が多かった。

「見合う」、「気軽に」、「普段の」という言葉から、本校の教師が考える授業公開とは、改まった授業研究会ではなく、日常の授業を開き、見合うことであると考えることができた。

(2) 校内研究の活性化のために

授業が分かり楽しいと感じ、意欲的に学ぶ

児童の姿は、教師にとって大きな励みである。児童の学びの姿を確かめつつ、指導方法や教材観などについて語り合うことができればと考えた。校内研究の活性化を支えるのは、教師一人一人の授業づくりへの情熱と、それを互いに支え合う教師の存在と考える。

校内研究を推進する際、大切にしたいのは、教師一人一人が、常に研究を自分自身の課題などと関連付けていることである。校内研究の活性化とは、新しいことや特別の試みを行うことではなく、児童のよりよい学びのために、日常の授業を対象化し、授業づくりの工夫を継続することであると考えている。授業を計画、実施し、授業検討会を通して指導の工夫改善に結びつけるという、(計画—実施—評価—改善)のサイクルが機能していることが必要である。

以上のことから、校内研究の活性化を図るには、日常の授業公開の推進と、授業検討会の工夫改善が必要であると考えた。

## 2 活性化への第一歩

実態調査を踏まえ、校内研究の活性化の取組として、日常の授業公開を進めることにした。主な視点は以下のとおりである。

### (1) 協力校の研修会への参加

仙台市立田子小学校は日常的な授業公開を推進しており、昨年度は32回を数えていた。また、調査研究協力校として児童の学びの姿から授業を再構築する「授業の振り返り」で授業検討会の工夫改善を行っている。

この田子小学校の校内研修会に、本校の教師17名が参加した。本校の授業検討会では、指導方法や教材観が協議の中心となることが多かった。これに対し、田子小学校では、参観者が授業者の思いや願いを共有している。

授業者は、時系列にそって司会者や参観者が語る児童の学びの姿を基に、授業改善の方向性についての気づきを自ら話す。したがって、研究協議の話題が一般論になったり、参観者の視点で進められたりすることがない。常に児童の学びの姿と授業者とのかかわりという視点で、協議が展開されていた。

「授業の振り返り」では、授業者は授業改善への気づきを得て、参観者はそれを共有するという印象をもった。また、授業者が児童の学びの姿を、自らの言葉で意味付けることができれば、具体的な授業改善の手だてが浮かび上がることが理解できた。研修会后、直ちに今後の取組の方向性を探るため、「授業の振り返り」について調査を行った(表2)。

問1 授業検討会の印象
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業者の発問の意図がよく分かり、授業検討会のおもしろさを知った。</li> <li>・ 新しい試みに驚くと同時に興味を持った。</li> </ul>
問2 授業改善に生かすこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童の様子、つぶやきを見取る。</li> <li>・ 児童の思いを感じ取りつつ授業に臨む。</li> <li>・ 授業者の意図、発問、児童たちの発言、活動などすべてを時系列で振り返ることは授業改善にとっても大切である。</li> </ul>

表2 「授業の振り返り」を体感した感想(H18.5.24)

これによると、本校の教師はこれまでの授業検討会と異なる「授業の振り返り」という形態に、驚きを感じながらも、興味・関心をもったことが分かった。また、授業改善のためには、授業における児童の学びの姿を見ることが大切であると考えた教師が多かった。

以上のことから、校内研究の活性化の第一歩として、本校では、日常の授業公開に加え、「授業の振り返り」による授業検討会の工夫改善を柱に研究を進めることとした。

## (2) 研修会の実施

「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会をより具体的にとらえるために、校内研修を実施した。事前に本校の教師が研修会で学びたいことを取りまとめ、課題意識をもって臨むこととした。講師は委嘱研究委員に依頼し、事前に取りまとめた資料を課題として伝え理解を得た。

研修会では、これからの授業検討会に求められる視点や、「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の実際など3名の講師に講話をいただいた。

研修会終了後、教師が事前に提出した課題の解決がどのように図られたか、また、「授業の振り返り」についての理解が深められたか調査を行った(表3)。

事前の課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんな点がよいところなのか。</li> <li>・どんな方法で行うのか。</li> <li>・どのように授業を見ていくとよいのか。</li> </ul>
研修会で理解したこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の学びの姿に向き合い、授業をつくることは大切である。</li> <li>・授業者の思いや願いを理解し、参観者、司会者も授業を参観する必要がある。</li> <li>・授業者、参観者が授業改善の手だてを気付きから得る場として活用できる。</li> <li>・教師が自ら気付くことで力量を高める手だてになる。</li> </ul>

表3 「授業の振り返り」研修会から得た学び

(H18.6.19)

これによると、「授業の振り返り」についての理解が深まり、抱いていた疑問や不安が減少していることが分かった。また、「授業の振り返り」による授業検討会の効果を感じ、改めて田子小学校の校内研修会を見つめるこ

とができた。このような教師の意識を基に、「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会を校内研究に位置付けることとした。

## 3 活性化への取組

日常の授業を開くことと「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会を行うことを柱とし校内研究の活性化に向けて、以下のように提案した。

### (1) 日常の授業公開に向けて

教師一人一人が授業者となり、授業を開くことで見えてきた課題を、具体的にとらえることが大切であると考え、学級担任は一人1回授業を公開することを推進した。

#### ① 授業公開について

各学年の代表者から組織される現職研究部会と授業研究班で、授業公開の仕方を話し合った。昨年度まで全校授業研究会に向けて、行われていた事前授業の取組を生かすことにした。教材研究や、授業検討会は、これまでどおり学年単位に行い、授業は学年内だけではなく全校に公開することにした。これにより、学級担任は全員が一人1回ずつ授業公開を行うことになった。

#### ② 授業の参観について

学年単位に公開する授業は自由な参観とした。具体的には、参観者は授業の途中の出入りが可能で、参観者が同学年の教師以外にいないこともあり得ること、また、参観する時には授業者の思いや願いを共有し、児童の学びの姿を見ることとした。

### (2) 授業検討会の工夫改善に向けて

「授業の振り返り」による授業検討会では、参観者は授業者の思いや願いを共有し、児童の学びの姿を視点に話し合う。授業者は、授業のねらいに基づき児童の学びの姿をとら

え、意味付けていく。指摘されるのではなく、自ら気づき、得た改善点は、授業者の意識に残り、次時の授業改善に結びつくと考えた。

### ① 指導案について

指導案は、A4版1枚でとした。学習目標、学習活動の他、特に授業者の思いや願いを、書くこととした。

### ② 児童の学びの姿の記録

授業を参観したら、児童の学びの姿を記録する。参観者が記録した児童の学びの姿を基に、授業検討会で協議することとした。

### ③ 学年単位の授業検討会

学年単位の授業検討会は、4～5名の少人数での協議となる。同学年の教師であることから児童の実態はよく把握できていると考えた。したがって、一人一人の教師が児童の学びの姿の意味をどのようにとらえたか、授業のねらいに加え児童の実態からも話し合いができると考えた。

以上、「普段の授業で」と「参観できる時に」を柱とした授業公開を取組の方向性とするので、今年度の校内研究について共通理解を図ることが可能となった。

## 4 授業検討会の実際

全校授業研究会では「授業の振り返り」を取り入れ、問答式、ワークショップ形式の授業検討会を実施した。さらに、学年単位の授業検討会はワークショップ形式で実施した。

### (1) 問答式の授業検討会

第1回全校授業研究会は6学年国語「詩を味わおう」の単元の授業を公開した。学習教材は山村暮鳥作、詩「りんご」である。表4は授業検討会の一場面である。

**司会者：**本文の始めの3行にあまり触れずに

「かかえる」ととらえたのはどうしてですか。

**授業者：**「かかえる」という言葉にこだわるのが大切で、あまり始めの3行に触れると、児童の思考が深まらないと考えたからです。

\* 授業検討会后、授業者が「どんなに」「大きく大きく」とりんごの「一つ」を対比させる発問を入れるとイメージが広がると改善点を示した。

表4 6学年授業検討会の場面(H18, 7, 19)

司会者の「本文の3行に触れずに・・・。」という問いかけに答えるうちに、授業者は「かかえる」という言葉を児童にどうとらえさせたら読みが深まるか、迷いながら授業を進めていたことに気付いていった。授業者は詩の始めに戻ると、児童の思考も戻ってしまい、読みが深まらないのではないかと考えていたのであった。なぜ「かかえる」という言葉のみを取り上げののか、参観者も授業者自身も、この時初めて理解することができた。

このように、司会者の問いに答えるうちに、授業者自身も明確ではなかった教材解釈に「気づき」、実際の指導場面にそって具体的に確認することができたことが分かる。

司会者の問い掛けと授業者の答えから、授業者が児童の学びの姿をどのようにとらえ、指導していたかが、参観者に共有された授業検討会であった。



写真1 授業検討会の一場面

(2) ワークショップ形式の授業検討会

① 全員参加による授業検討会

第2回全校授業研究会は4学年理科「もののかさと力」の単元を授業公開した。

事前に現職部だよりを配布し、授業検討会の進め方について、共通理解した(表5)。

表6は授業検討会の一場面である。

プログラム		時(分)
1	学年部の研究について	5
2	授業者から① 本時の提案	3
3	全体協議①	10
4	グループ協議①(4~5名×7) 児童の学びの姿をとらえる	20
5	全体協議②	15
6	グループ協議②研究の視点の協議	5
7	全体協議③	10
8	授業者から② 気づき、改善点	3

表5 4年理科授業検討会の進め方

参観者1: Aさんは空気がもれたことを、「ちぢむ」と言っている。

参観者2: Bさんは「もれる」「逃げる」とは違うから、「ちぢむ」と書いている。

司会者: 児童の「ちぢむ」のとらえ方についてはどう考えましたか。

授業者: 「もれる」ことを「ちぢむ」と同じととらえたり、「もれる」とは違うから「ちぢむ」ととらえたりしている。曖昧でとらえにくい言葉であった。

参観者3: 児童は書きながら考えを整理していた。ノートの活用のさせ方を工夫したい。

参観者4: 児童は書くことで、論理的に話すことにつながると考えた。

表6 4学年授業検討会の一場面

グループ協議で参観者は、児童の学びの姿を個人名を挙げながら、活動や表情などについて具体的に話した。司会者は話し合われた

児童の学びの姿を全体協議で取り上げ、授業者が授業改善の具体的な手だてを得られるように問い掛けた。

今回の授業では、「空気はちぢむか。」という学習課題について、授業者も参観者も、予想できなかった児童の学びの姿があったことを共有することができた。「考えを深め伝え合うために、書く活動を工夫する。」という研究の視点についての話し合いも児童の学びの姿を根拠に、検討することが可能となった。

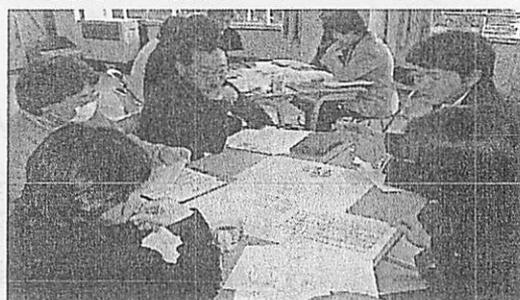


写真2 授業検討会の一場面

② 学年単位の授業検討会

3学年は理科「明かりをつけよう」の単元を公開した(表7)。授業検討会は5名で行った。

授業者: Sさんは「わからない。」と言う。理科に苦手意識がある子だが友達の様子を見てから、試して「ついた。」と喜んでた。

参観者1: Tさんは向かいの子からヒントをもらえることを知っている。今回もそうしていた。

参観者2: Kさんはグループの話し合いの後に、正しい答えを導き出した。

授業者の気づき

一人で考えるとあきらめてしまうが、友達の話をもヒントにして考えている。グループの取組には学び合うよさがある。

改善

グループ学習における学び合いを、今後の指導でも大切にしたい。

表7 3学年授業検討会の一場面

Sさん、Tさん、Kさんがそれぞれ異なる方法で学習目標を達成していることが分かる。理科を苦手としている児童や、ヒントを得て自分なりに学習を進めている児童など、授業者が担任をしている児童の実態を、同学年の教師も理解しており、一つの課題に対しても、児童の学び方は一様ではないことが協議された。授業者は児童が課題を解決するためにグループ学習が効果的であると考えた。

以上のように「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会では、学習のねらいに基づいてとらえた児童の学びの姿から得た気づきにより、次の授業に生かせる改善点を得ることができると分かった。

## 5 今後の校内研究活性化のために

今年度の校内研究の柱である日常の授業公開と「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会の工夫改善の取組について意識調査（表8、表9）を行った。その結果、研究の二つの柱について、次のような教師の変容が見られた。

### (1) 教師の変容

5月の調査を踏まえ、校内研究の活性化の視点について、調査を行った。

#### ① 日常の授業公開

今年度は学級担任が一人1回授業を行い、21回の授業が公開された。授業を開くことで、参観の機会も増えた。

- ・全員で授業づくりをすることを通して、自分の指導のねらいが焦点化できた。
- ・他の児童を見て、担任している児童の反応を考えた。

表8 日常の授業公開について（H18, 12, 8）

他の学級の参観をとおして、授業のねらいや児童の学び方について、教師が自分の課題

ととらえていることが分かる。

### ② 授業検討会の工夫改善

表9は「授業の振り返り」を授業検討会に取り入れたことについての感想である。

- ・児童の学びの姿から指導の手だてを考える場となった。
- ・授業者の思いを理解できた。
- ・授業づくりにおける自分の課題が分かった。

表9 授業検討会の工夫改善について

「授業の振り返り」による授業検討会では、参観者は児童の学びの姿を見る視点を持たなければならない。12月の調査では「児童の発表の内容」、「児童の表情やしぐさ」を参観の視点に挙げる教師が、5月の調査に比べて大きく増えていることが分かった（図1）。

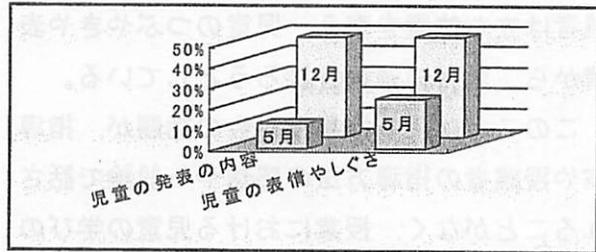


図1 授業参観の視点の変化

また、参観者が児童の学びを見取るための工夫をしていることが12月の調査から分かった（表10）。

- ・児童は前から見ると、表情やしぐさから、挙手や発表がなくても、思考を深めていると分かった。
- ・4人の児童を見ていたら、児童の思考の変化や実験の様子が流れとしてとらえられた。
- ・言葉を聞き取ったり、書き取ったりしようと思い、児童の近くによった。

表10 児童の学びの姿を見るための工夫

児童の学びの姿を教室の後ろではなく、前からあるいは、近くによって見ていること、さらには、表情やしぐさから児童の思考についても見取ろうとしていることが分かった。このように、参観時の教師の立ちが位置が変

わってきていることが明らかとなった。

今年度、本校の教師が日常的に授業を開くことで、授業者としての意識を強くすることができたと考える。代表者による授業公開では、自分ではない別の教師のための教材研究という意識があったが、今年度は全員が授業者という立場で教材研究ができた。授業のねらいや児童の学び方について、自分の課題を考えることができたのである。

さらに、大きく変容したのは、授業を見る視点である。「授業の振り返り」を取り入れたことで、児童の学びの姿を見るという参観の視点が求められた。授業者の思いや授業のねらいに基づき、児童の学びの姿をとらえ、その意味を授業検討会で話し合うために、参観者は立ち位置を変え、児童のつぶやきや表情から、思考の過程を探ろうとしている。

このことにより授業検討会の話題が、指導案や授業者の指導方法の感想や一般論で話されることがなく、授業における児童の学びの姿を基に、授業者が自らの課題や改善点を具体的に得ることにつながった。

日常の授業公開と授業検討会の工夫改善に取り組み、教師が授業者としての意識を強め、自分の課題を見つめたことで、校内研究は自分の研究であるにとらえることができるようになっていくと考える。

## (2) 今後の課題

今後の課題として、改善を生かした授業づくりに取り組みたいと考える。

今年度は、研究に対する教師の意識を継続させるために、(計画—実施—評価—改善)という授業づくりのサイクルを機能させようとした。その結果、学級担任が一人1回ずつの授業公開を行い、教師一人一人が自分の授業を振り返る機会となったことは成果である

といえる。

さらに、校内研究を活性化させるには、授業検討会で得た改善の手だてを、一人一人の教師が、どのように授業で具体化させたかについて、検証が必要であると考えている。自分の授業の改善点を示しながら、授業づくりを行い、授業公開する取組を考えている。

授業づくりのサイクルの改善—計画を、教材研究にあたる部分ととらえ焦点化し、(改善—計画—実施—評価)というサイクルを意識していきたい。教材研究に関する情報の収集や指導方法に関する校内研修会など教材研究の機会を設定することを考えている。

## (3) 校内研究を支え続けるもの

教職経験が少なく発言する自信がなかった教師が、授業検討会で児童の学びの姿から協議に進んで取り組む姿があった。

また、他校の公開研究会に参加した教師から、自分が児童の学びの姿を根拠に授業を見ていることに気が付いた、ということ伝えられた。校内研究での取組が教師の変容に結びついている例といえよう。このように教師が自分自身のよりよい変容を自覚することは、校内研究への意欲を高める基盤となる。

日常の授業公開と授業検討会の工夫改善を柱とした、本校の校内研究の活性化の取組は、始まったばかりである。調査研究協力校の視察や委嘱研究員の協力など外部の協力を得て学ぶ機会を得たことは、校内研究の活性化への第一歩を踏み出す上で大きな力となった。

一人一人の教師が校内研究の取組を通して、自分の課題をとらえ、改善点を明らかにしながら授業づくりを継続することで、さらなる変容が感じられることを目指していきたいと考えている。

仙台市立袋原小学校 滝川真智子

## 第3部

# 校内研究の活性化と「授業の振り返り」

## <実践編2>

---

### 第1章 研究主任として

- 1 校内授業研究会の活性化を目指して  
仙台市立五橋中学校 教諭 登嶋 紀行
- 2 校内研究の活性化と「授業の振り返り」  
仙台市立七北田中学校 教諭 前田 政夫
- 3 校内研究の活性化と「授業の振り返り」  
仙台市立長町中学校 教諭 菅原 壮之

### 第2章 教科研究に取り組んで

- 全教科・全教師による「授業の振り返り」—  
仙台市立東仙台中学校 教諭 横橋 雄市

### 第1章 学年主任として

- 実際に「授業の振り返り」を経験して—  
仙台市立市名坂小学校 教諭 千葉 春枝
-

### 3 校内授業研究会における具体的な取組

#### (1) 全教員による授業公開

本校の教師は、もともと高い研修意欲をもった集団である。市内の中心部にある学校として、教科研究会等で授業提供を要請されることが多い。しかし、校内の全教師が参加できる授業研究の機会は、多くはなかった。

昨年度の校務反省会の話し合いから、校内で取り組む授業研究会の必要性が確認された。年度当初の計画では、9教科を三つのグループに分け、グループから一人ずつ輪番制で授業を提供することになった。ところが、研究推進委員会において、その具体について話し合ううちに、メンバーから「もっと多くの教科の授業を見たい」、「自分の学年の生徒の様子を確認したい」、「日常的な授業研究をねらうのであれば全員が授業を公開してはどうか」という意見が提案された。その後、数回の話し合いを持った結果、計画を見直し、「全員による授業公開」という形で授業研究を進めることになった。

また、授業を公開するにあたっては、具体的に次のような共通理解を行った。

- ・ 11月から12月にかけて授業を公開する。
- ・ 指導案はA4サイズ 1枚の略案とする。
- ・ 授業の準備よりも授業検討会を充実させる。
- ・ 教科の壁を越えて自由に授業を見ることができる。(学年部の教師はできるだけ参加する)

授業検討会の時間確保など、クリアーしなくてはならない様々な制約があったものの、まずは、全員で授業をやってみようという本校教師の熱い思いから、全員授業がスタートした。

### 授業研究実施一覧 (H18.12.7現在)

授業研究日	教科領域	授業者	単元名
9月8日(金)	道徳		集団と自己のかかわり
10月23日(月)	数学		多角形の内角と外角
11月16日(木)	音楽		アルトリコーダーの表現
11月16日(木)	理科		化学式
11月21日(火)	理科		身のまわりの物質
11月21日(火)	社会		世界と日本の人口
11月27日(月)	家庭		健康と食生活
11月28日(火)	理科		物質資源の利用
11月28日(火)	技術		情報モラル
11月28日(火)	保体		ダンス
11月30日(木)	国語 TT		行書の筆使いと字形
11月30日(木)	美術		レリーフのための顔絵制作
11月30日(木)	英語		Unit8 はじめてのカナダ旅行
11月30日(木)	音楽		アルトリコーダーに親しもう
12月1日(金)	英語		Unit7 カナダの学校
12月1日(金)	英語		Reach for Your Dream
12月4日(月)	保体		柔道
12月4日(月)	保体		柔道
12月7日(木)	社会		旧石器人の技に迫ろう
12月7日(木)	特文		クリスマス会の企画

#### (2) 生徒の学びの姿を語る授業検討会(授業の振り返り)

仙台市教育センターでの先行研究を参考に「授業の振り返り」を取り入れた授業検討会を導入することにした。「授業の振り返り」は、教師が日々の授業の中で、自分と生徒のかかわりにおいて起きたことを確かめ、自分の言葉で明らかにしていくことを重視したものである。多くの教師は「授業の振り返り」の経験がないことから、夏休みに校内研修会を開き、共通理解をするところからはじめた。授業検討会では、授業経験プロセスシート(授業記録)を基に、「授業の振り返り」を実施した。参観者には、事前にプロセスシートを配布し、記録をとりながら授業を参観してもらうようにした。また、授業者にも授業後に、プロセスシートの記入をお願いした。

授業経験プロセスシート H〇年〇月〇日			
主な発問	事象(教師)	事象(生徒)	感想
授業者があらかじめ記入しておく	時系列に沿って、授業の中で自分に見えていたこと、自分に経験されていた事象を記入する欄		左の欄に記入した事象に対しての解釈や感想を記入する欄

- ・授業を開くことに対する抵抗感がなくなった。
- ・授業研究をやってよかったと思えるようになった。
- ・個々の生徒理解が深まった。
- ・授業者の立場で授業を参観し、授業を検討するようになった。
- ・他教科であっても授業研究ができることが分かった。

「授業の振り返り」は、授業者のプロセスシートに、参観者の見取りを加えながら、時系列で進められた。特に司会者は、次の点について確認していくことにした。

- ・授業者の願いやねらい
- ・計画を急ぎよ変更した場面とその意図
- ・授業中の生徒の学びの姿

## (2) 主体的な授業改善

授業者は、生徒の姿で授業を振り返る経験を重ねていくと、次のような自分自身の変化に気付いていく。

- ・授業に対するくせやこだわりの自覚  
(例 理解の遅い、または速い子に合わせて授業を進めている、指名に偏りがあるなど)
- ・生徒の学びをしっかりと見取ろうとする意識

(例 ○○さんのプリントの記入状況、○○さんの発言やつぶやきの意味など)

こうした授業者の意識の変化が、授業改善の視点を明確にし、個々の教師の主体的な授業改善につながった。

## 5 課題

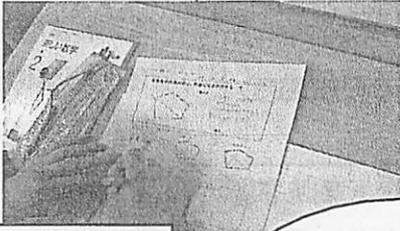
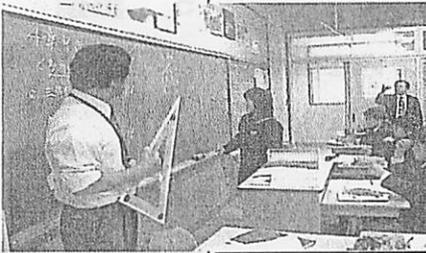
今年度の取組では、授業検討会の充実という点で課題が残った。それは、学校行事の準備や諸会議のため、放課後の時間設定に無理があったためである。来年度は、授業研究の実施日を計画的に配置することで授業検討会の時間を十分に確保していきたい。

また、「授業の振り返り」については、「生徒の学びの姿」と「教師の内面過程」が重要なポイントになる。教師の内面過程を明らかにすることは、その教師の教育観にも触れることであり、デリケートな問題も含んでいる。参観者の受容的な態度と共感的理解は言うまでもないが、今後、授業者が自己開示できる場の条件について探していきたい。

仙台市立五橋中学校 登嶋紀行

# 授業経験プロセスシート

H18年10月 日 校時

主な発問	事 実 (教師)	事 実 (生徒)	感 想
<p>1 三角形, 四角形の角の合計は何度だろう。</p>		<p>ほとんどの生徒が手を挙げた。180° 360° は理解している。</p>	<p>流れはスムーズ。反応もよい。</p>
<p>2 五角形の内角の和は, 何度だろう。</p>	 <p>いろいろな方法で求めてみようという指示。他のクラスでは5つ見付けたとヒントを出す。</p>	<p>Mさん, あっさり公式を出す。事前に塾で学習しているようだ。</p> <p>まわりと相談していない。個人で思考することを望んでいるようだ。</p>	<p>ヒントでやる気が出たみたい。</p>
<p>3 六角形, 七角形の場合はどうなるだろう。</p>	 <p>いろいろな方法が出たが, 1つの方法に着目させたい。</p> <p>「合理的な方法は?」と問い掛ける。</p>	<p>発表者4名。1人の声が小さい。後ろまで, 声が届かない。</p> <p>自分の考えた方法で解いている子どもがいる。</p>	<p>Hさん, 540°の大きさがイメージできていないかも。</p> <p>発表者の声もう少し大きいといいかな。</p>
<p>4 百角形の内角の和を求めてみよう。</p>		<p>時間が足りないかも。</p>	<p>いろいろな考えが出ておもしろい。</p>

※ □の中は授業者が記入。○の中は参観者の情報。写真は印象的な場面を使用。

◇第1章2◇ 研究主任として

## 校内研究の活性化と「授業振り返り」

### 1 はじめに

今年度4月に本校に赴任して、まずは過去の校内研究の資料を読み、これまでの流れを確認し、自分にできることを考えた。

そこで、今年度はこれまでの本校の校内研究の流れを踏襲しつつ、平成16年度に務めた調査研究委員としての経験を生かし、「生徒の学びの姿」に視点を置いた授業研究を進めていくこととした。

### 2 本校の校内研究の現状

#### (1) これまでの校内研究

平成14年度より、教師全員が少なくとも3年間に1度は授業研究をし、基礎・基本の充実を図ることを目標に研究を進めてきた。

授業研究にあたって、各教科を3つの部会に割り当てた。

A部会	国語	社会	英語
B部会	数学	理科	
C部会	音楽	美術	保健 技家

年2回の校内授業研究会では、各部会から1教科ずつ授業を提供し、指導案の検討から研究授業後の部会ごとの授業検討会や全体会まで、活発な討論がなされてきた。

昨年度の授業研究では、授業の視点として「授業者のはたらきかけ」に着目しており、参観者は「授業者の発問」や「机間指導の様子」を中心に授業記録を取っていた。授業検討会は従来型で行われ、「授業者のはたらきかけ」の視点をもとに話し合いがもたれた。

もっぱら話題の中心は授業者となり、発問の是非や机間指導での生徒への対応といった

指導法や感想が中心の話し合いであった。

#### (2) 今年度の校内研究

##### ① 今年度の授業検討会の視点

昨年度までの「授業者のはたらきかけ」への着目から、「生徒の学びの姿」への着目に変更した。授業観察のポイントとして、授業者の指導に対して、自分（参観者）の近くにいる生徒の学びの姿を中心に観察し、授業検討会での話題にすることを事前に伝えた。

##### ② 授業研究の概要

年間計画に基づき、7月12日（水）に第1回校内授業研究を行った。A部会から英語科、C部会から美術科が授業を提供し、部会ごと準備を進めた。今回授業を行わなかったB部会は二つに別れ、A、Cそれぞれの部会に所属し、6月30日（金）に指導案検討会を行い、当日を迎えた。

授業研究は、研究授業の後、部会ごとの授業検討会、全体会という流れで行い、授業検討会は、従来型の授業者自評、質疑応答の形式で行った。今年度の授業検討会の視点である「生徒の学びの姿」への視点を補うために、事前に「生徒の学びの姿」に着目した授業検討会での発言例をまとめたプリントを配布し、発言の参考にするよう伝えていた。

（資料作成：仙台市立東六番丁小学校 熊谷裕行教諭）

##### ③ 検討会の様子と授業者の振り返り

授業検討会は10人前後の同僚のみということもあり、おだやかな雰囲気の中で行われた。質疑応答では各々の先生方が「生徒の学びの姿」を中心とした発言をし、話し合いを

進めることができた。

課題としては、時系列に沿った発言ではなく、一問一答的な発言が多かったこともあり、授業者の振り返りが十分になされてはいなかった点である。しかし、複数の参観者から生徒の様子を聞かされた授業者が、「生徒がそこに着目するとは思っていなかった。次に他のクラスで授業をするときにはこうしたい。」といった自己反省と授業の修正案を何度か発言していた。また、参観者からは「他教科の分科会でも発言しやすかった。」という声も聞かれた。

全職員には「生徒の学びの姿」に着目した授業検討会が浸透してはいなかったが、授業者や参観者の上記ような発言を大切にしながら、これからも授業検討会を積み重ねていきたいと考える。

### 3 校内研究の活性化に向けて

校内授業研究は一大イベントであると感じている教師も多いのではないだろうか。分科会や全体会のあとの「お疲れさま」の言葉の中に、「これでやっと終わりですね」の気持ちを強く感じることもある。

授業研究はゴールではなく、再スタートと位置づけなければならない。ねらい達成に向けた授業者の思いと、生徒の実態をすり合わせて授業を改善していく良い機会である。このことを自分自身が強く意識するようになったのは、2年前からこの調査研究に携わり、「授業の振り返り」を実際に体験したことが大きい。授業検討会で参観者から自分の見ていなかった生徒の姿を知らされ、こうすればよかったと自分で気が付き反省するので、次の指導を前向きにとらえられる。それゆえ再スタートなのだと考える。

研究主任としての私の今後の課題は、いかにして授業研究を一大イベント化しないための手だてを講じていくかである。

一つ目の手だてとして全職員の手で創り上げた授業研究にしていきたいと考える。今年度の授業研究は授業者のみに多くの負担がかかるものであった。教師は誰でもよりよい授業を目指しているので、各々の個性や経験を皆で出し合い、皆で校内研究に取り組む体制を作っていかなければならない。そのためにも授業検討会のもち方や指導案の形式の見直しについて、職員会議や研究推進委員会、教科部会などの場で全教職員で検討していきたいと考えている。

二つ目の手だてとして、職員の同僚性を生かしていきたいと考える。職員室で教科担任が授業中の生徒の様子を学級担任に伝えている様子をよく見かける。それがその生徒の良い面であれ悪い面であれ、学級担任の知らなかった(気付かなかった)一面であれば、生徒理解が深まり、個々の生徒に対応したよりよい指導に生きてくるだろう。そのような何気ない職員室での一場面の雰囲気や授業検討会に取り入れられれば、互いの意見を尊重し合える、よりよい授業研究になるのではないかと考える。

以上の2点に重点を置いて来年度の校内研究を進め、誰もが納得できる校内研究を目指していきたい。

仙台市立七北田中学校 前田政夫

### 司会者(プロンプター)の言葉がけの例

- 単元、本時の授業における教師の願いについて、お話ししてほしいのですが。
- 今、授業を終えての印象を端的に言うとうなるでしょう。
- 生徒たちのどんな様子から、そう思ったのかな？
- 先生はここにこう書いているんだけど、どんなことをもとにこう考えたの？
- 参観者のみなさんで、同じように感じた人はいますか。
- 授業者はこういっているのですが、参観者の先生方には、生徒たち(授業者)は、そう見えませんか？
- 生徒たちがこの活動をしているとき、どんなことを考えていたのかな？
- 指導案検討会の時に話題になったこの場面するとき、先生としては、予想通りでしたか？生徒たちの様子を見取って、どうだったでしょう。
- この場面において、生徒たちはどんな学び(経験)をしていたんだろう？
- 当初の計画と変えて(変わって)しまったことなどあったのかな？
- 何を見取って変更したのだろう？
- 授業者としては、今日の生徒たちの学びをふまえて、次時以降、どのように進めていきたいと思っていますか？
- 今日やってみて、本時のねらいは達成できたでしょうか。生徒たちの様子からどうでしょう。今後、どうしていきたいかあればお話ししてください。



### 参観者としての言葉がけの例

- ×私ならあの場面でこうした方がいいと思うのですが。
- ×あのようなときはこうするべきではありませんか？
- 私は、あの場面であの子の様子をこう見取りました。そこで私ならこうすると思うのですが、先生はあのようにされました。先生の中でどのような判断があったのでしょうか。  
(※まず、自分の見取りを述べた上で根拠を問う。)
- お二人のやりとりとは違って、私はこう見ていました。そして私はこういう方法もあるかと思うんですが、他の先生どうでしょうか？  
(※プレーンストーミング的に他の参観者に話題を広げる。)
- ×私は同じ単元を去年こうしました。その方がいいと思うのですが。
- 私が去年受けもった生徒たちはこんな実態があったのです。それでこんな手立てで授業をしてみました。今回の生徒たちにこの手立てをとったのは、授業者としてどんな判断があったのでしょうか？
- 先生が生徒たちに問いかけたとき、○○さんは「〜〜。」とノートに書いていましたよ。  
○○さんってこんな考え方をするのだね。
- 私が見た□□さんは、なかなか書き出せなくて、私は、その場面でどんな言葉をかけてあげたらいいか考えつかなかっただけで、誰か考えありますか？
- 先生は、何度も「〜〜。」と言っていて、私はそれをこうとらえたんだけど、本当は何を伝えられたの？

#### 参考文献

- 「教育はいま」第12,13号 仙台市教育センター教育研究紀要平成16,17年度
- 「授業の中で起きていることを確かめる」藤沢市教育文化センター研究紀要 2003
- 「教師という仕事と授業技術」奈須正裕 2006

## ◇第1章3◇ 研究主任として

## 校内研究の活性化と「授業の振り返り」

## 1 はじめに

どの学校においてもそれぞれ、生徒の実態や身に付けさせたい力、教師の思いなどを考え、校内研究のテーマを設定している。そして、その研究の検証の手段や研究内容に関する授業レベルでの提案として、授業研究を行い、その授業について話し合うというのが通常の校内研究の手法であると考えられる。

学力的な面で生徒の変容を期待する場合、学校における授業の意味が非常に大きいことは、いまさら言うまでもなく、提案授業（授業研究）を通して、職員全体で研修を深める意義は大きい。授業改善を通してわかる授業を作り上げて行くことが、実践的指導力の向上であり、学校現場における実践研究に期待される役割であると考えられる。

しかし、中学校の場合は教科担任制というシステムもあり、ともすると授業作りについて授業者や同教科の教員だけが行うようになり、授業検討会が方法論や目標に対しての到達の度合いを話し合う場になってしまう。このため、他教科の教員を含めて、全体での話し合いが充実するというのが難しい状況にある。そこで、職員全員が目的意識を持ち、授業改善を中心とした実践研究に意欲的に取り組む方策として、校内授業研究会までのプロセス、「授業の振り返り」という観点から3年間の取組をまとめてみた。

## 2 研究授業を通じた校内研究の活性化を図るために

「授業研究を通じた校内研究の活性化」を

ためには、計画作りの工夫や提案の適時性などがあげられるが、研究主任として一番大切にしなければならないことは、全員が何らかの形で研究に参加できるような体制作りであると考えられる。

そこで平成16年度からの取り組みとして、全教科で、参観しあう授業を年間1回は行うことや校内授業研究会（学習指導訪問を含む）の実施日を11月下旬～12月上旬に設定し、1年間に三つないし、四つの教科を職員全員で参観することとした。また、授業当日までの間に3回、授業に関する話し合いの場を設け、多くの先生方が授業にかかわる事ができるように考えた。1回目は、8月下旬（夏休み中）に全員が各分科会に分かれて授業アウトラインの検討会（授業のアイデアをみんなを出し合う）を行い、授業者と一緒に授業を考えるという場を設定した。2回目は10月中旬、全員が分科会に参加して指導案検討会を行った。3回目は、教科による指導案検討会を11月に実施し、授業作りを行った。

また、校内授業研究会後に職員のアンケート調査を実施し、その内容を次年度の校内授業研究会に反映させることで、内容の改善を図った。特に授業検討会に関しては、他教科の教員が参加して行こうが、もっと活発に話し合い内容を深めたいという要望が強かった。

## 3 3カ年の校内授業研究会の概要

## (1) 研究テーマ

① 平成16年度「基礎・基本の定着をもとに学力向上を図り、自ら学ぶ生徒を育成

する指導のあり方」

② 平成17・18年度「自ら学ぶ力を育てるための指導と評価のあり方」

(2) 授業検討会の概要

① 16年度 従来型の授業検討会

- ア 提案授業
- イ 授業者自評
- ウ 質疑応答
- エ 指導助言

指導法などについての話し合いが行われ、成果があったが、感想中心になってしまう部分も多く、授業改善に向け焦点化した話し合いができなかった。その理由としては、視点を明確にした授業観察ができなかったことや進行の工夫の不足があげられた。

② 17年度 授業観察の視点を明確にした授業検討会

基本的には、従来型と同じ進め方であるが、授業観察カード(資料1)と「分科会を充実させるために」(資料2)という資料を配付し、授業中の事実に基づいた話し合いや授業者の振り返りを促すような進行の工夫をした。その結果、授業中の事実が話し合いの中心となり授業改善に向け焦点を絞った話し合いが行われ成果があった。しかし、一つの分科会の人数が20名を超えていたため、少人数で内容を深められる話し合いの必要性があげられた。

③ 18年度 ワークショップ形式の授業検討会

- ア 提案授業
- イ 授業者によるねらいや思いの説明
- ウ 授業参観者による授業の検討
- エ 検討内容の発表
- オ 検討結果の報告から授業者が考えたことや今後の授業作りの説明

を兼ねていたため、近隣の小学校の職員も参加して分科会を行った。その結果、各分科会の人数が20名を超えることになり、一人当たりの発言の時間が少なくなったということが、事後アンケート調査から考察できた。授業参観カードを活用して、授業参観を行ったので、校種の違う教員が参加した話し合いでも、視点を明確にした話し合いができたものの、授業中の生徒の学びの姿を中心とした多様な発言を引き出すまでには行かず、もっと深く話し合える場を望む声が多かった。

また、授業者にとっては、自分自身が、授業を振り返り、自分の授業について考えたり、改善すべき点に気付く部分もあったが、話し合いの中で、参加者から指摘される場面も多く、授業者を中心に授業検討会のあり方を考えるという観点から、従来とは違う検討会の必要性が生じた。

(2) ワークショップ形式の授業検討会

以前の調査で、本校の職員でワークショップ形式の授業検討会に参加した経験のある人数は、5名(全教職員数が44名)であることがわかったので、定例の職員会議の際に「ワークショップ形式授業検討会資料」(資料3)を配布し、授業検討会についてのイメージを持てるようにした。

また、プロンプターの進め方が大切であることから、以前にワークショップ形式の検討会に参加した経験がある職員が中心にプロンプターを務めることにした。初めてプロンプターをすることになった職員とは、疑問点を話し合い、進め方の確認を行った。参加者は、各分科会12名~14名であることからA、Bの2グループに分け、話し合いの人数を6~7人とした。検討会の時間については、話し合いを深めるといふ点から80分間とし、参加者がじっくりと意見を述べるができる時間

4 今年度の取組を通して

(1) 授業検討会の改善の必要性

17年度は、校内授業研究会が学習指導訪問

を確保した。

### (3) 授業検討会の事後アンケートから

今年度は、本校でワークショップ形式の授業検討会を初めて実施した。そこで、授業研究会の中でも、特に検討会の内容を中心に職員対象のアンケート調査を行った。その結果をもとに考察を加えたい。

①「ワークショップ形式の授業検討会についてどの程度知っているか」という設問では「聞くのも、参加するのも初めて」という回答が20名（回答者数37名）と1番多く過半数という結果であった。「名前は知っている」と回答が12名であり、ほとんどの職員にとって、予備知識が無い状態の検討会であった。

②「生徒の様子など、観察がうまくできたか」という設問では、多くの職員がプラス傾向の回答をしており、事前の資料などの活用をもとに、授業を観察する場所などを各自が考えたことを示す結果であった。

③「従来型の授業検討会と比べ、話し合いは活発に行われたか」という設問に関しては、「活発に行われた」という回答が29名、「どちらかといえば活発に行われた」という回答が7名（回答者数36名）であり、全職員が活発に行われたという傾向の回答をしていた。ワークショップ形式の授業検討会の長所が確認できる結果であった。

④「従来型の授業検討会と比べて話し合いは深まったか」という設問に関しては、「深まったと思う」という回答が16名で、「どちらかといえば深まったと思う」という回答が15名であった。（回答者数36名）全体的には、話し合いの深まりが伺える結果ではあるが、③の結果と比較した場合、活発に話し合いが行われたが内容の深まりに関しては、進め方の工夫や話し合いの主題の焦点化など、今後改善が必要な点が考察できる結果であった。

### ◎ 事後アンケート、記述内容から（抜粋）

#### ① 長所と考えられる意見

- ・他教科でも参加しやすく良かった。
- ・意見、考えを出しやすく良かった。
- ・多くの方の目を見たものがリアルに付箋で貼られていくので授業のポイント、問題点、議論が必要なところがわかりやすかった。
- ・ワークショップ形式は、とても話し合いやすかったと思います。
- ・ワークショップ形式を行うことで授業を2回見ることができた感じがした。
- ・生徒の気付きのメモのとり方が様々でしたが、これでもいいのかなと思いました。みんなでこういう視点で授業をみるのが大切です。
- ・授業が再現されつつ、話し合いを深めることができるような、とても良い話し合いだと思いました。

#### ② 今後工夫が必要だと考えられる意見

- ・A、Bグループの話し合いの深まりに差があり、もう少し焦点化した話し合いの工夫が必要だと思いました。
- ・色々な意見が出されたが、それをもとに話し合いの方向付けをするのが大変でした。
- ・授業者としては、A、Bどちらか一方の話し合いにしか参加できないので、もう一方の話し合いの内容が気になりました。

### 5 まとめ

はじめにの項でも述べたが、実践的指導力の向上とは、授業改善を通してわかる授業を作り上げていくことが大きな柱となると考える。

そのような観点から、職員全員が参加して

行う授業作りや授業検討会の持ち方を考え、全体での取り組みが充実するような方向性を導き出していくことが、校内研究の活性化につながるということを確認できた3年間の取組であったと感じている。

本校の授業検討会の持ち方を考えた場合、この3年間それぞれ違う形で行われたわけだが、前年度の反省や意見を次年度に生かしていった結果、今年度は、必然的にワークショ

ップ形式になったという経緯を改めて認識している。ただし、ワークショップ形式の検討会が万能な検討会ではないことが、授業検討会の事後アンケートの内容からも考察できる。次年度以降については、今回の反省や意見を参考にし、内容の深まりを追究するような方向性を示すことが、本校における校内研究の活性化につながると思う。

仙台市立長町中学校 菅原壮之

資料1

平成17年11月28日

－ 分科会を充実させるために －

授業検討会(分科会)に対する考え方

－授業者を含めた参加者が研究を深め合えるような検討会－

(1) 話し合い(意見を言う際)の視点を明確にした、検討会を行う。

今回の授業では

① 授業中の「自ら学ぶ力を育成する」ような場面について(教材、学習環境、授業の進め方など)

② 授業中で行われている指導者の観察、支援について

(自ら学ぶ力を育成するような評価場面や評価の工夫などと関連して)

③ 授業で取り扱った題材について、小学校の題材との関連

また、上記内容の意見から派生したものをテーマとして話し合いを進める。

(2) 生徒の学びの姿を自分なりに分析して、それを伝え合うような検討会を行う。

「あの場面で、このようにしていたらこうなっていたのではないか。」「自分だったらこんな方法でやったと思う。」というのではなく、授業者が気付いていない部分(生徒のつぶやきや、行動などから観察者が考えたことや事実)を授業者に伝え合えるような内容が大切であると考えます。

(3) 授業者の意図が聞きだせるような検討会を行う。

このような発問をした先生の意図は、どこにあるのですか?などのように、授業者からその意図を聞き出すことによって、参加者全員が授業者の思いを共有できるような検討会ができればよいと思います。

(4) 「授業者から」という場面では

従来の授業者自評(「あの場面で、もう少しこのようにしていれば、このようになっていたのではないか」というようなコメント)ではなく、「今日の授業では、〇〇に視点を置き、〇〇のような学習環境を設定し、〇〇のような力をつけるための授業を行ってみました。」というような、授業者の思いや考えが伝わるような話しや、指導案検討会から授業を行うまでのプロセスの説明、授業の中での具体的な工夫点の説明があると、参加者全員が今日の授業の意義や授業者の工夫を共有できると思います。

資料2

平成18年11月24日  
研究部

ワークショップ形式授業検討会資料

1, ワークショップ形式授業検討会の長所について

- (1) 授業内の事実に着目し、授業を分析することができる。  
※「こうしていれば、こうなったと思う」というような仮定の話になりにくい。  
※従来型の授業検討会の場合は、到達目標に対しての到達度や指導に対する方法論中心の話し合いになりがちでした。
- (2) 授業者が、授業内で気付いていない事実を確認できる。
- (3) 教科の特性に関係なく授業参観者は、授業を観察し、検討会に参加できる。
- (4) 少人数なので参加者全員が話しに積極的に参加できる。  
※以上のような内容から授業者が、自分の授業について自分自身で振り返りができます。

2, ワークショップ形式検討会を行うための授業参観について

- (1) 参観者は、付箋を準備する。
- (2) 授業内で気付いた事実を付箋に書き留める。(生徒の様子, 反応, 教師の働きかけなど)  
例1 授業開始部分で、全体への説明の時の生徒の表情が真剣  
例2 机間指導の際に〇〇くんの所で時間をかけて丁寧な個別指導をしていた。  
例3 提示したテーマについて、私が観察した6班の話し合いがなかなか進まなかった。  
例4 先生の〇〇という説明に対して、5班の〇〇くんから「なるほど」というつぶやきがあった。  
例5 6班は話し合いの時間の途中であったが、「全体の話し合いはやめてくださいという」先生の指示があった。(ここで、全体の話し合いをやめた先生の意図を教えてください。)  
※色の違う付箋を準備し、「教師のはたらきかけ」「生徒の様子」に分けて記入するなど工夫できます。

3, ワークショップ形式授業検討会の進め方

- 1 机をくっつけて班活動の形状にする。
- 2 指導過程の部分を模造紙大に拡大したものを準備する。
- 3 1グループ、4~8人ぐらいのグループを作る。(司会者1名、必要があれば記録者1名)
- (1) 授業者が参加者全体に対して、今日の授業のコンセプトや工夫した点、見て欲しかった部分などを中心に説明を行う。
- (2) 参観者が、各自の記録(付箋に記入したもの)をもとに授業について気付いた事実を述べる。その際に、付箋を拡大指導案の該当する部分に貼る。  
※拡大指導案に貼られた、付箋の分布の様子から授業の山場がわかったりもします。  
※司会者の進め方として「まず、導入の部分についてみなさんから気付いた事を言って下さい。」というように時系列に話し合いを進めていくという方法が一般的です。また、参観者が気付いたことを述べている場面で、他の参観者に「〇〇班の様子はどうでしたか？」というように意見をもとめるのも良い方法です。
- (3) 参観者の意見の提示の後、共通の話題を見つけて話し合う  
※授業者が入っている班であれば、授業者の意図や考えなどを聞くことで、授業にある背景を共有することができます。
- (4) 各班の代表者(司会者や記録者)が班で話し合われた内容について発表する。
- (5) 授業者が、班の代表者の発表を聞いて考えたことや今後の授業作りの構想などを発表する。

4, その他

- (1) 全体の司会者は大きな部分の司会のみを進めるのが主な役割である。
- (2) 全体の記録者は、授業者の説明や班の代表者の発表を記録する。

◇第2章◇ 教科研究に取り組んで

## 全教科・全教師による「授業実践の振り返り」

### 1 はじめに

本校における「授業の振り返り」の実践は、今年度で3年目を迎える。過去2年間も、学校としてこの調査研究に携わってきたため、多くの教師が授業の振り返りにかかわる機会を得ていた。

また、本校は平成17、18年度仙台市教育委員会認定自主公開校である。全教師が授業研究に取り組み、その授業検討会に「授業の振り返り」の手法を取り入れ、試行錯誤しながら研究を進めてきてきた。4月には、転入職員と共通理解を図るため、授業の振り返りに関する研修会を実施した。

「授業の振り返り」を実施する時間の確保のため、実践授業をその日の最終の時間に固定し、授業終了20分後から1時間程度の時間設定で行った。メンバーは、同教科を中心に弾力的に運用した。保護者の参加も呼びかけ、貴重な発言もあった。

### 2 振り返りの実際

7月3日(月)国語科、T教諭の授業を基に行った振り返りの実際を紹介する。学習材は「走れメロス」である。

T教諭は、授業のねらいとして

- ① メロスをよみがえらせたものは何か
- ② メロスが走り続けることにどんな意味があるのか」の2点をあげていた。

①について、T教諭は、「最初の発問がうまく伝わらなかったために、時間がかかった。」と感じていた。しかし、振り返りの中で、参観者から「ある生徒が辞書で『こんこんと』という言葉の意味を調べていた。」「隣の生徒と言葉の意味を確認している生徒がいた。」とい

う見取りが示された。このずれを基に、T教諭は授業中に起きたことを再確認していった。

授業者と参観者の見取りのずれは、昨年私も授業者として経験したことであり、振り返りを構成する重要な要素である。このずれを授業者が意味付けていくことに価値がある。T教諭は「こんこんと」という言葉の意味から、その表現の効果へというステップで生徒がつまづいていたことに気付いていったのである。

次に②について、生徒各自が自分の考えを書く場面である。この場面では、すぐに書き出す生徒と書き出すことをためらう生徒にはっきりと別れた。T教諭は、書き出さない生徒に対して丁寧に机間指導を行った。振り返りの中で、プロンプターである私が「書いていた生徒の中身はよかった」と発言を切り出すと、複数の参観者からも同様の見取りが示された。振り返りが進む中で、「どんな意味があるのか」という発問が、一部の生徒には考えにくかったことに、T教諭は気付いていったのである。授業者と生徒の認識のずれとも言える。このずれも「授業の振り返り」を構成する重要な要素である。

この振り返りの経験を基に、T教諭は「教材研究をしっかりと行い、流れを意識して授業を作っていきたい。教師が使う言葉一つで、授業は変わってしまう。考えさせる発問を吟味したい。」と自らの課題を述べている。

### 3 振り返りを経験した教師の声

「授業の振り返り」の後、全教師が①もう一回授業を行うとしたら変えてみたいこと、②自分の授業の特徴や傾向、③今後の授業づくりの課題や改善したいことの3点を自由に記述した。以下にその抜粋を示す。

<p><b>数学科の教諭 「多項式」</b>                  ①理解を確認するだけで授業を終えたが、理解したことを表現させることを試みたい。</p>
<p><b>理科の教諭 「運動と力」</b>                  ①内容が盛りだくさんだった。考えさせる時間を長くとり、余裕がある生徒には発展学習の課題を示したい。</p>
<p><b>数学科の教諭 「文字と式」</b>                  ②個別の対応に時間をかけすぎる面がある。                  ③個別に見るポイントを絞った指導過程を構成したい。</p>
<p><b>英語科の教諭 「プログラム5」</b>                  ①下位群の生徒に自信をもたせるため、英語を区切って読むことも試みたい。                  ②下位群の生徒に手をかけることにこだわり、時間がかかってしまう。</p>
<p><b>かたくり学級の教諭 「作業」</b>                  ②結論を急ぎ、指示が多くなってしまふ。考えさせ、気付かせる時間が少なくなりがちである。                  ③あえて間違いを共有し、そこから導き出すことを大切にしたい。</p>
<p><b>かたくり学級の教諭 「作業」</b>                  ②考える場面で、待ちきれず、つい指示を出してしまう。作業の場面では手伝ってしまう。</p>
<p><b>保健体育科の教諭 「バレーボール」</b>                  ①技能面と情意面を分けて目標設定させたい。                  ②ゆっくり考えさせる場面が少なかった。生徒個々の気づきが少なかった。</p>
<p><b>技術科の教諭 「木材加工」</b>                  ①改めて見てみると、内容がやや盛りだくさんであった。時間をかけて体験させることで、意欲を高めたい。                  ③待つことの大切さを心がけたい。待つことによつて、生徒の思考力を高め、意欲につなげたい。</p>

#### 4 「教師のまとめ」から言えること

「授業の振り返り」を経験した教師のまとめから、三つの共通点を上げることができる。

1点目は、多くの教師が1時間の内容が多すぎると感じていることである。S教諭は、「内容が盛りだくさんだった。考えさせる時間を長くとり、余裕がある生徒には発展学習の課題を示したい。」と述べている。T教諭は、「内容がやや盛りだくさんであった。時間をかけて体験させることで、意欲を高めたい。」と述べている。考える時間を保証し、生徒の意欲を高め、理解を深めていきたいという各教師の課題意識の高まりが見られる。

2点目は、個々の生徒に対応したいと考えている点である。T教諭は、「下位群の生徒に自信をもたせるため、英語を区切って読むことも

試みたい。」と述べている。H教諭は、「個別に見るポイントを絞った指導過程を構成したい。」と述べている。一人一人の生徒を大切にしようという意識が見られる。

3点目は、理解の深まりを目指している点である。K教諭は、「理解を確認するだけで授業を終えたが、理解したことを表現させることを試みたい。」と述べている。T教諭は、「あえて間違いを共有し、そこから導き出すことを大切にしたい。」と述べている。「分かる」という過程が一面的ではないことに、教師の視点が向いていっていると言えよう。

それぞれの教師が獲得した授業改善の視点は、決して目新しいものではないかもしれない。しかし、自分の経験を通して、自分の言葉で語られる内容にこそ、価値があると考えられる。

#### 5 研究のまとめ

##### (1) 成果

学校の全教師が授業研究に取り組み、「授業の振り返り」を行えたこと自体に、まず価値があった。個々の教師が自分の言葉で課題を述べ、翌日からの授業を変えていこうとする意識をもつことができた。

また、参観者の立場で、自分の授業では見られない生徒の学びの姿を見ることができた。そのことが、生徒を見る目を少なからず磨くことにつながったと考える。

##### (2) 今後の課題

月に6~7回の実践授業が組まれることもあった。より少人数、短時間でできる振り返りの方法を模索していくことが求められる。

また、本校では振り返りの感想シートを通して、以後の授業について考えようとしたが、振り返りはゴールではないことを考えると、長期的な視野に立った改善を考えていくことも必要であると考えている。

仙台市立東仙台中学校 横橋 雄市

### ◇第3章◇ 学年主任として

## 実際に「授業の振り返り」を経験して

### 1 はじめに

調査研究協力校である仙台市立田子小学校に、昨年度は教科指導員としてかわり、今年度は委嘱研究員となって、この取組を自校の校内研究の取組に生かしたいと考えた。

本校では、研究教科を理科として校内研究に取り組んでいる。そこで、6 学年の学年主任という立場から、理科専科でもある本校研究主任とともに「授業の振り返り」に取り組むことにした。ただ、取組自体が本校では初であり、委嘱研究員で教育センター長期研修員でもある 2 名の先生方に指導いただき、10 月 30 日に授業研究と「授業の振り返り」を行った。以下に、その取組についてまとめる。

### 2 授業までの取り組み

#### (1) 事前検討会の在り方

今回の「授業の振り返り」にあたっては、研究主任から、指導案検討会から話し合いの仕方を変えていくことを提案された。指導過程を模造紙大に拡大したものを用意し、「ワークショップ形式」による話し合いを行った。

話し合いの中で話題になったことを付箋紙に書き込み、参加者が意見を出し合い、その場で修正を重ねていった。

また、事前の授業検討会では予備実験も行い、実際の授業における児童の反応を予想したり、より分かりやすい実験方法などを探っていた。

#### (2) 授業を参観するにあたって

参観の観点を以下のように事前に説明した

①教師の視点からではなく、児童の姿を記録していくこと（児童のつぶやき、反

応）

②授業者から出される視点に沿って、記録をすること

③参観者の主観ではなく、児童の学びの事実を記録していくこと

また、調査研究協力校である田子小学校の実践研究を参考に、「授業プロセスシート」と「座席表」を作成して活用することにした。

#### (3) 授業検討会のプログラム

問答法だけでは、参観者が意見を出しにくいという考えがあり、問答法とワークショップ形式を組み合わせた「授業の振り返り」を行うこととした。

##### ①「問答法」（振り返り 1）

ここでは、指導過程の 1.2 について、授業者の働きかけと児童の学びの姿を記録したシートをもとに、司会者から授業者への問いかけによる「授業の振り返り」を行う。

##### ②「ワークショップ形式」

ここでは、三つのグループに分かれて、指導過程 3.4 について、授業中に付箋紙に書き留めた児童の学びの姿をもとに話し合う。

##### ③「問答法」（振り返り 2）

指導過程 5.6 について、司会者から授業者への問いかけとグループで話し合ったことの発表による授業の振り返りを行う。

##### ④「まとめ」

最後に授業者自身が授業を振り返る。

### 3 本時の授業について

6 年生で理科の授業を行った。

(1) 単元名「水よう液の性質とはたらき」

ねらい・視点	主な学習活動・視点	予想される反応
<p>ムラサキキャベツのしるを使って、酸性の水溶液とアルカリ性の水溶液を混ぜ合わせると、金属をとかすはたらきがなくなることを、水溶液の性質が変わったことと関連させて理解することができる。</p> <p>&lt;視点1&gt; 発展的な題材を指導計画に盛り込んだことで、児童は調べようとする意欲を高めていたか。</p> <p>&lt;視点2&gt; 教材と提示の工夫について</p> <p>①指示薬としてムラサキキャベツのしるを使ったことで、実験に意欲を持って取り組むことができたか。</p> <p>②提示の工夫として予想の段階で3択の問題としたことで、予想した理由の話し合いの場面で焦点化させることができたか。</p> <p>③視聴覚機器を活用したことで実験の結果を整理する手立てとすることができたか。</p>	<p>1 塩酸と水酸化ナトリウムの水溶液にアルミニウム片を入れたときの実験結果を確認する。 &lt;視点2の③&gt;</p> <p>2 課題をつかむ。 &lt;視点1&gt;</p> <div data-bbox="550 555 1371 703" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>酸性の水溶液とアルカリ性の水溶液を混ぜ合わせると、アルミニウムを溶かすはたらきはどうなるだろうか。</p> </div> <p>① 激しく溶ける ② 同じように溶ける ③ 溶けない &lt;視点2の②&gt;</p> <p>3混ぜ合わせた水溶液にアルミニウム片を入れる実験をする。 &lt;視点2の③&gt;</p> <p>4 ムラサキキャベツのしるを使って中性の液を作る実験をする。 &lt;視点2の③&gt; &lt;視点2の①&gt;</p> <p>5 まとめ</p> <div data-bbox="546 1440 966 1756" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>まとめ 塩酸と水酸化ナトリウム水溶液を混ぜ合わせるとアルミニウムをとかすはたらきがない理由</p> </div> <p>6 酸性とアルカリ性の水溶液の混ぜ合わせを使った実験を視聴する。 &lt;視点2の①③&gt;</p>	<div data-bbox="1006 304 1351 555" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">  </div> <p>・どちらも溶かしたからさらに激しく溶けると思う。</p> <p>・中性になって溶けなくなると思う。</p> <p>・溶けなくなった。</p> <p>・少し溶けたが前より溶けなくなった。</p> <p>・中性にならずに酸性になってしまった。</p> <p>・中性になった。</p> <p>酸性とアルカリ性の水溶液を混ぜ合わせるとアルミニウム片を溶かすはたらきはなくなる。</p> <p>理由 混ぜ合わせた水溶液が中性になったから。</p>

司会者	授業者・参観者
<p>① 問答式1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業を終えての感想をお話してください。</li> <li>・前時までの児童の理解についてはどうですか。</li> <li>・視聴覚機器を活用した理由はなんですか。</li> <li>・発展的な題材を盛り込むことで、児童の意欲についてはどうですか。</li> </ul>	<p>授) 酸性とアルカリ性を混ぜると中性になるということはつかんでいたが、最後の科学館でのビデオを見てからの挙手の様子では、完全に混ぜ合わせるとで中性になるということをつかんでいないように見られた。</p> <p>授) 実験に興味を持って取り組んでいる児童が多いので、定着が見られていた。</p> <p>授) 前回の激しく解ける様子を見せることで、本時の実験で泡が出て、前回と違うということを意識化させたかった。</p> <p>授) 教科書では発展教材は週末にあり、今までの学習と切断されてしまう。普段の授業と発展を継続させることで児童の意欲を高めていきたいと考えた。(略)</p>
<p>② ワークショップ形式(グループ毎に視点に沿って話題を出し合う)</p>	
<p>③ 問答式2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループでの話し合いの結果を発表してください。</li> </ul>	<p>A) 激しく解けると予想していた子がおかしいと思いながらアルミを覗き込んでいた。</p> <p>B) OO君は、指差し確認をして混ぜ合わせていた。変化しなかった事実を静かに受け止めていた。歓声が上がるところもあり、グループによって違っていた。</p> <p>C) 予想とは違う驚きの声があった。ビーカーに入れるときにこぼしたが、そのことは考えずに解けたことに注目していた。</p>
	<p>授) そこは視点の一つであった。ビデオの映像で、「かき混ぜ方」「こぼさないように」という配慮が足りなかった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導過程3と4の実験のつながりについてどんなことが有効でしたか。</li> </ul>	<p>C) まだムラサキになっていないグループは、もうムラサキになったグループのを見て焦っていたが、できたとき歓声が上がっていた。</p> <p>B) OOさんのグループは、1滴ずつ入れていたが、确实だった。方法を伝えていった方が良かったのではないか。</p> <p>A) OO君が続けてやるところだったが、他の人に回していた。18滴めで変わった。他のグループの変化が伝えられたので、そこでストップした。</p> <p>C) OO君のグループで「今、(水溶液の色が緑ということはもうすぐ中性だ)とつぶやいている児童がいた。教師の話聞き、見通しを持っているのでこのような発言になったと思う。(略)</p>
<p>④まとめ(授業者より)</p> <p>生活から離れた薬品が出てきたり、生活とかかわりの深いものもあつたりするので、生活の中でも理科の現象があるということ、理科の実験の中で児童たちに気付かせていきたい、と思った。一つの指示でできるできないが出てくるので、今後の実験に生かしていきたい。</p>	

#### 4 「授業の振り返り」の実践

「問答法 1」では、司会者の質問に授業者が答えるという形で進められた。授業を終えての感想や実験に対する児童の興味関心についての話から始まり、視聴覚機器を何度も活用した意図や発展的な題材を扱った理由などが話された。

「ワークショップ形式」によるグループ毎の話し合いでは、参観者が記録しておいて付箋を基に、授業者から出された視点に沿って話題を出し合った。「振り返り」を行う前に司会者から、授業の中で起きた事実を中心に授業者に振り返ってもらい、気付いてもらうことが目的であることを話されていたので、話し合いは、児童のつぶやきや様子を中心に進められた。参加者のほとんどが発言することができた。

「問答法 2」では、児童の発言やつぶやき、活動の様子を具体的に挙げながらグループでの話し合いの結果を発表したり、授業者が実験に対する思いを話すことができた。

#### 5 「授業の振り返り」を実践して

##### (1) 授業者の気付き

理科の実験において、児童は学習内容が日常生活との関連があることを意識することが少ないという実態がある。しかし、現実には自然の事物や現象は身近な生活と関連しているということを、児童たちに気付かせたいと考える。

これまでの事後検討会では、協議の視点がぼやけたり、授業改善の方策について指導助言に頼りがちになることがあった。また、参観者が意見を十分に出不せないということがあった。今回の「授業の振り返り」では、児童の学びの姿を基に協議が進められるため、最終的に授業者は、今後の授業改善のためにど

のような方策をとればいいのかを自らの気付きを基に明確にすることができた。これにより、授業者は時間をかけて取り組んだことが報われたという思いを持つことができた。

##### (2) めざす校内研究の姿

「これまでの授業検討会とは違う」と説明しても、イメージができないまま「授業の振り返り」に参加した先生方が多かった。しかし、実際に体験し、話し合いに参加することで、「授業の振り返り」について気付いたことがあった。

第一に、「授業の振り返り」では、これまでの経験談や指導法についての話題は控えて、あくまでも授業の中で起きた児童の学びの事実や姿が基本となること。

第二に、実際の授業では、参観するグループを事前に決めることで、児童の学びの様子を見取ることが容易になること。

第三に、「授業の振り返り」は、児童の学びの姿や事実を基本として授業が再現されることで、授業者は自らの指導や児童とのかかわりを中心に、今後の課題が明確になること。

「授業の振り返り」のよさは、児童の学びの姿に基づくことで、話し合いの論点が本時の授業からそれないというところである。授業の流れに沿って、研究の視点を話題にしなが話し合いが進められることは、授業者にとって、授業そのものが有意義になり、次への意欲にもつながっていくことになる。

また、話し合いに参加した教師は、授業での見取りを発言するために、参観する際に視点にそった見方ができるようになる。

今回の「授業の振り返り」を生かし、授業者にとっても、参観者にとっても有意義な授業検討会となるように、本校の実態にあった方法を追究していく契機になればと考える。

## 第4部

# 実践的指導力の向上と「授業の振り返り」

## <実践編3>

---

---

### 第1章 研修会における取組を通して

- － プロンプターの役割と参観者のかかわり －

仙台市立東六番丁小学校 教諭 熊谷 裕行

### 第2章 校内研究における日常的な実践

- － 校内における「授業の振り返り」の実践から

仙台市立東宮城野小学校 教諭 伊藤 美穂

---

---

◇第1章◇ 研修会の取組をとおして

## プロンプターの役割と参観者のかかわり

### 1 はじめに

今年度、調査研究委員として市内小学校の校内研修会や公開研究会などで、プロンプター(司会)などの役割を経験した。ここでは、他校における研修会や自校での校内研究をとおして学んだことについて述べる。

### 2 「授業の振り返り」への期待と疑問

「授業の振り返り」についての理解を目的とした校内研修会に臨む際には、事前に先生方の疑問を把握することに努めた。

その内容から、「授業の振り返り」あるいは「授業リフレクション」という言葉は、多くの先生方に知られるようになったことがわかった。しかし、実際に見たり、経験したりしたことがほとんどないために、取り入れることにとまどいがあるのも事実である。

中には、「プロンプターの役割が大変なのは」、「参観者は、どんな意見を言えばいいのか」、「今までの検討会の方が、指導力が向上するのでは」という質問もある。取り入れてみたいと考えながらも、「授業の振り返り」をすることで、「本当に教師としての力量が高まるのだろうか。」という疑問があることを改めて感じた。

### 3 プロンプターの経験から言えること

#### (1) 参観者とプロンプターのかかわり

【事例1】「授業リフレクション研修会」

■授業者 東宮城野小 4学年教諭

■国語科「白いぼうし」

参観者は、これから校内研究に「授業の振り返り」を取り入れようとしている学校の先生方である。

プロンプター 導入の部分の振り返りをしてきましたが、参観者の方々から、何かありませんか？

参観者 ……

(中略) その後も何度も参観者に発言を促すが、発言なし。

プロンプター 「あまり嬉しかったので乗せてきた松井さんの気持ちが分かるところに線を引きましょう。」と言って机間指導したあたりで、先生方から何かありませんか？

参観者 あの、こういうこと言っているのでしょうか。思ったこと言っているのですか？

プロンプター まずどうぞ言ってみてください。

発言がなかった理由として、「授業の振り返り」は、児童の学びの事実を中心に行われることが挙げられる。児童の学びに目を向けていなければ、発言することが難しいのである。授業を参観する際、これまで私たちが、いかに授業者の教授行為を中心に見てきたかがうかがえた。当然のことながら、そのような見方をもとに行われる検討会は、参観者からの指摘が多く、授業者にとっては受け身的な場になると考えられる。

また、参観者の「こういうことを言ってもいいのでしょうか。」という発言に対して、私は「まず、言ってみてください。」と促した。その参観者は、児童からの質問を取り上げ、授業者がそれをどう受け取ったかを尋ねてきた(詳細は次章『2校内における「授業の振り返り」の実践をとおして』参照)。私は、参観者からのこのような発言は、次の発言で指摘につながっていくと判断した。そして「はじめに先生(参観者)がどう見たかをお話ししていただければ・・・」と投げかけた。

これまでの検討会では、参観者はまず授業者の考えを確認し、その後「でもそれは・・・。」

と授業者の考えを否定して自分の考えを述べる  
ことが多い。これも授業者に心理的な圧力をか  
ける要因になっている。

児童の学びの事実をできるだけ多く出し合う  
には、参観者の見取りを引き出すことが欠かせ  
ない。その際、私は「はじめに参観者がどう思  
っているのかを述べること」が、授業者の素直  
な気付きを促すと考える。授業者と司会の語り  
合いを中心にしながらも、参観者同士の語り合  
いがある「授業の振り返り」も可能であると考  
えている。

(2) 授業者と司会（プロンプター）のかか  
わり

【事例2】「田子小学校公開研究会」

■授業者 田子小 1学年教諭

■国語科「みんなにしらせたいこと」

授業者が他校の先生であることから、事前授  
業と検討会にも参加させていただいた。プロン  
プターは、本時の授業がどのような過程を経て  
行われているのかを把握しておくことが望まし  
い。本時の授業では、「事前授業を受けて変更し  
た点」、「事前授業で課題として上げられた点」、  
「予定外に働きかけを変えた点」などを中心に  
授業を振り返った。

また、授業の流れやねらいを把握するために  
プロンプターとしての「授業記録用紙」を用い  
た。「授業記録用紙」には、授業を参観する視  
点を明記することで、授業の中で起きている事  
実をできるだけ記録することができた。

4 自校の校内研究での経験から

(1) 自らの気付きを自ら語ること

【事例3】「初任者の授業研究」

■授業者 東六番丁小 5学年教諭

■国語科「わらぐつの中の神様」

本校でも、今年度から校内研究の授業検討会  
に「授業の振り返り」を取り入れている。

初任者であっても、「授業の振り返り」をと  
おして自ら気付き、自らの言葉で語ることで  
できることがわかった。

プロンプター 「そのとき、おみつさんはどんな  
気持ちだったんだろう。」と発問しましたね。先生  
としては、どんなことを引き出したかったのかな？  
授業者 サイドラインを引かせたとき、気持ちに  
つながるところには気付いていたと思いました。そ  
れで、この発問をしたのですが、あまり（意見が）  
出なくて。例えば、「気持ちは？と発問するより、  
心の中でどんなことを考えていたのかな？などと  
聞いた方がよかったのかもと思います。」

(中略)

プロンプター まとめとして、今日の授業で先生  
が学んだことを、3つにしぼって挙げてください。  
授業者 一つは、発問のしかたで子どもの考えの  
出方が変わってしまうので、気持ちを聞くときに  
は、特に気をつけたいと思いました。二つめに、一  
問一答でなく、もっと子どもと話をしなければと思  
いました。他の子どもどう思っているかよく分から  
ないので、三つめは、おさえるべきキーワードを教材  
研究でしっかり把握しなければ、子どもの発言を拾  
えないと思いました。

【プロンプター用の「授業記録用紙」】

指導過程	留意点	時刻	教師の働きかけの見取り	児童の反応の見取り	確認・振り返り
3. 見つけたものを発表する。 一人一人	地図・絵・写真・実物な どを手がかりにさせる。	13:54	○みんなで公園に行 きました。今日も校庭 に行きましたね。校庭 で見つけたものをた くさん教えてください。 ○声のダイヤルいい ね。	○さん：ドングリを 見付けました。 ○さん：サクランボ みみたいに、赤くて棒 がついていました。	※児童らの様 子から、言い方 のモデルを示 す必要があっ たか？ ※モデルを提 示した意味を 確認
モデル ほくは〇〇を見付けました。 モデル わたしが見つけたのは、〇〇です。					

〈視点〉◇授業の特徴 ◇精神状態 ◇繰り返した説明 ◇行動への働きかけ ◇思考への働きかけ  
◇活動時間 ◇個別・机間指導 ◇取り上げ（なかっ）た表現 ◇学習形態 ◇情意へ働きかけ

他校での研修会で、経験の浅い先生方にとって「授業の振り返りが指導力の向上につながるかどうか疑問である」という声も聞かれた。しかし、この実践事例から、初任者であっても自分の授業を振り返り、児童の学びの姿から、発問のしかたに問題があったことへの気づきを得ていることがわかる。そして、「どんな気持ちだった？」という発問から「心の中で何を考えていたのかな？」という新たな発問を自ら考え出すに至っている。

確かに経験年数などによって、量的にも質的にも、気づきに差があるのも事実である。それは、自分が必要としていることがそれぞれの力量によって異なっているからであるとも言える。必要としていること以外について、参観者から多くの示唆をいただいたとしても、授業者が自分のものにできずに終わっていたことが、これまでの検討会では多かったのではないだろうか。

これに対し、授業者が自らの授業を振り返り、自分が見取った事実から以後の指導について語っている段階で、自分に足りなかったものを自分事として習得しているのだと言える。実践的指導力の向上とは、まさにこのような事例のことだと考えている。

## (2) 「授業の振り返り」の形態の工夫

付箋紙に見取ったことを書き入れ、指導過程の中に貼っていくワークショップ形式の授業検討会も行った。プロンプターは、それをもとに、話合いの重点や時間配分などを考える。

この方法には、次のような長所がある。

- ① 限られた検討会の時間を有効に活用できる。
- ② より多くの参観者の意見を、話合いに反映させることで参加型の検討会が展開できる。
- ③ 話合いの内容を焦点化させることができる。校内研究などで「研究の視点」を設けている場合にも、「授業の振り返り」を取り入れることが可能であると考えている。

調査研究1年次の「授業の振り返り」は、プ

ロンプターと授業者による問答式の形態ではじまった。2年次には、フリーカード法（詳細は「教育はいま」第13号参照）なども実践した。3年次に入り、本校でも工夫された形態で実践が行われている。今後、さらに実践を重ね、工夫改善を加えながら「授業の振り返り」に取り組んでいきたい。

## 5 おわりに

研修会後のアンケートには、前向きな回答が多い。「授業を見る新たな視点を学びました。」「授業者の思いを分かってもらえることができるように感じました。」「ふだんの会話の中に、児童たちの様子が語られるようになればいいなと思いました。」などである。

### (1) プロンプターを経験しての変化

プロンプターを経験することが多くなって、自分自身で変わったと感じることは、次の2点である。一つは、授業で起きている事実をなるべく逃さず見取ろうと意識するようになったこと。もう一つは、授業者にとって必要な答えは、授業者自らがもっていると考えるようになったこと。以上のことから、授業を参観し話し合う際には、参観者として謙虚に学ぶ姿勢をもちたいと思っている。

### (2) 大切にしたい同僚性

授業者の思いに共感し、認められるという安心感は、授業公開の壁を低くすることにつながる。相互に授業を開き、「振り返り」をとおして学び合うことは、同僚性を高める上で大切な視点である。教師同士が信頼し合ってこそ、厳しい指摘にも納得がいくであろう。

「児童たちの学びの姿が語られる」ことで、学校全体で児童を育成しているという教師の意識が高まってきていると考えている。

仙台市立東六番丁小学校 熊谷 裕行

## ◇第2章◇ 校内研究における日常的な実践

## 校内における「授業の振り返り」の実践から

## 1 はじめに

本年度、校内において私は「授業リフレクション研修会」での授業者や、校内研究で授業者検討会における「授業の振り返り」の司会者を経験することができた。以下に、私自身が実践して得たものを記したいと考える。

## 2 「授業の振り返り」の分析

## (1) 授業全体の流れに関する気付き

<「授業の振り返り」記録より>

参観者 あんなに聡明なAさんが、最初の「にこにこして」の時に「矢印を引いてうれしかったとか書くんですか?」と聞きましたね。そうしたら先生が「いいよ、Aさんの言葉で」と言いましたね。あの質問なんかは、先生はどのように受け取られましたか?

司会者 先生はどうお感じになりましたか?私はこう見た、ということをお話していただいたほうが授業者も話しやすいと思いますので。

参観者 私が見たところでは、矢印の下になぜ選んだのかという理由を書くのか、どんな気持ちが分かるのかを書くのかがとらえにくかったのではないかと思うのです。(中略)

授業者 今のお話を聞いて「あーなるほど」と思ったんですけれども、指導案ではもともと「何故そこを選んだのか理由を書かせる」と書いてあったんですね。ですが、直前に分かりづらいと思って、「松井さんのどんな気持ちが分かるか」と変えました。自分の中でもこの聞き方は悩んだところだったので、子どもたちに伝えるときに分かりづらい聞き方をしてしまったのかもしれませんが、Aさんに聞かれたときには、「全体が分からないのかな」というところまでは考えませんでした。でも、その後に子どもたちの分からない様子に直面したときに、「松井さんのどんな気持ちが分かるか書くんだよ」と言ったんですね。そのところ浸透が…。もしかしたら子どもたちは書き方が分からなかったのかも知れないと、今思いました。

「授業の振り返り」の中で、参観者からある場面での児童の質問について取り上げられた。私は、授業の中でその質問を受けた時、その児童の個人的な戸惑いであると判断し、軽く流してしまっていた。しかし、その質問は私の指示のあいまいさを示唆しており、児童全体の戸惑いを代弁するものであったことが「振り返り」を通して明らかとなった。この児童の質問の意図を理解していれば、

全体に対して適切な支援ができたであろうと考え、それと同時に自らの教材研究や発問・指示の在り方を見つめ直す機会となった。「こうした方がよかったのでは」と一方的に価値観を押し付けられるのではなく、児童の反応を見取った参観者が自分なりの解釈で語ってくれたことで、見えなかった授業中の児童の学びの事実を謙虚に受け止めることができた。

## (2) 個々の児童への支援に関する気付き

<「授業の振り返り」記録より>

参観者 私は後ろの方を中心に見ていたのですけれど、Sさんというお子さんに先生が声をかけていらっしゃったんですね。なんて声をかけているのかなあと思ったのですが、彼女は始め「にこにこ⇒うれしいな」と書いていたんですけれど、次の「においまで私に届けたかったのでしょうか」のところで矢印を書いて、そこで鉛筆が止まっていたんですね。そこにちょうど先生がいらして、「なかなかいいところに気付いたね」という声があったんですね。それからしばらくしてその子を見たら、理由のところに「おふくろさんが私のことを考えているよといいたかった気持ち」とかそのようなことまではっきり書いていたので、先生の一言で、これでいいんだなという気持ちになれたのだと思います。

授業者としての私は、机間指導の際、児童にこまめに声をかける傾向がある。指導的な意図をもって声をかけることが多いが、時には純粋に感じたことを口にすることもある。しかし、それらの声がけが支援として成立しているのかどうかを確かめる機会は普段の授業ではそれほど多くない。

「授業の振り返り」では、表現を選んで鉛筆を止めていた児童が、声がけの後に書き出していたことが取り上げられた。全体の中では埋もれがちであるが、その場で確かに起きていた個々の児童の学びの様子から、自分の授業行為や支援の有効性を知ることができた。

## 3 校内で行われる授業検討会における「授業の振り返り」の活用

## (1) 全校研究授業における授業検討会

授業リフレクション研修会における「授業の振り返り」の分析で得た気付きを基に、「授業の振

り振り返り」に向けて以下の工夫を試みた。

① 授業全体の流れを把握する工夫

司会者は、授業全体の流れや児童の学びの方向性を把握する必要がある。そこで、「学習活動」「主な支援と留意点」「時刻」「教師の働き掛け」「児童の反応」「検討会で取り上げたい内容」が書き留められる項目欄を設けた「司会者ノート」を作成し、記録に活用した。「司会者ノート」を活用したことで、授業者は授業全体の流れを形づくる児童の発言や反応を把握することができた。その結果、授業のねらいなどに結び付く児童の発言や教師と児童とのやり取りから生まれた方向性を提示することができ、振り返りの促進に役立てることができた。

② 個々の児童の学びを把握する工夫

参観者が児童の姿をより具体的に語るためには、児童の学習の様子を細かく把握する必要がある。そこで、児童を五つのグループに分け、授業



観察用のシートを使って、児童の反応を個人名で記録することとした。その結果、「授業の振り返り」において参観者は個々の児童の学びを具体的に提示することができ、授業者は自分が見えていなかった一人一人の児童の学習の様子を知ることができた。

<授業観察シートの形式>

学習活動	児童名			感想
	A	B	C	
I 問題文を理解する。				

なお、上記のものは、その後の授業検討会においても形式を変えながら活用した。

(2) 学年研究授業における授業検討会

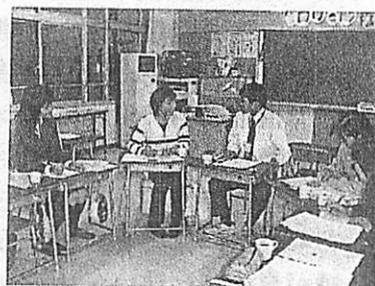
① 学年による教材研究の実施

初任者研修の研究授業に向けて同学年の教諭と教材研究を行った。経験の違いなどによる異なった授業観を基に、お互いの意見を交流しながら

指導案を作成した。

② 授業者の思いに焦点を当てた「授業の振り返り」

1時間という限られた時間の中の検討会だったため、授業者の思いに焦点を当てて「授業の振り返り」を行った。



理科の授業を実践した授業者は、授業直後の印象として「児童の多様な考えを整理することができず、本来のねらいが達成できなかったように思う」と自分の授業を語っていた。それを受けて、参観者は様々な場面でねらいにつながる児童のつぶやきがあったことを個人名で提示した。授業者は、「学習のめあてに関係する児童のつぶやきを取り上げていけば、授業のねらいに迫ることができたかもしれない。」と自らの授業を振り返り、「同じ授業をするなら、活動の条件を限定したい」と改善案を具体的に語る事ができた。また、参観者からも、自分の授業に生かせる要素を本時の授業から学ぼうとする意欲が感じられた。

<授業者の感想>

振り返りを行うことで、自分が授業の中で見ていなかったり、聞き逃していたりする場面が多いことに気付かされました。児童がめあてに関係するつぶやきをしていたり、工夫したりしながら取り組んでいる様子に気付いて取り上げながら、授業を作っていく必要はないかと改めて実感しました。また、先生方と教師の言動や児童の反応を一つ一つ確認しながら振り返ることで、その場面での自分の考えや、本時の進行を変更した時の思いを振り返りながら話すことができるので、「この場面ではもっとこうすればよかった」ということや、「今度同じ授業をするならこう進めよう」ということを明確にすることができました。

<参観者の感想>

児童の反応中心に振り返ると、授業の様子を鮮明に思い出すことができて良かった。具体的な話があった。反応中心に授業を参観したが、授業のねらいにせまるつぶやきが多く見られた。全体に向かって気付きを発信できない児童の考えをどうやって取り上げるか考えていきたいと思った。

(3) 学年部研究授業における授業検討会

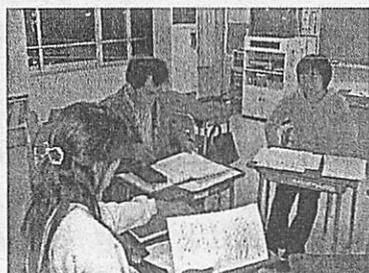
① ねらいに基づく「授業の振り返り」

学年部授業では、一時間の検討会の中で授業のねらいに重点を置いて「授業の振り返り」を

試みた。理科の授業を实践した授業者は、授業後の印象で「児童の実験結果のまとめ方に十分なものを感じる」と語っていた。「授業の振り返り」の中で授業者は、時間を気にして進度を速めた心境を思い出し、「実験結果を確認する場面での指示があいまいになっていた」と今回の授業を振り返った。授業者は、「漠然とした反省は一人でもできるが、記録を基に自分が言ったことや児童の反応を再現することで、その時の心境が具体的に思い出せる。」と「授業の振り返り」の印象を語った。

## ② 司会者の役割交代

学年部で授業者を経験した教師が、次の授業検討会で司会者の役割を行った。司会者は、検討会にあたり、



「何を授業者に問いかければよいのか」「どのように進めればよいのか」という戸惑いを抱いて

いたが、「授業の流れに沿う」「児童の姿を語る」という二点を確認して「授業の振り返り」を進めた。授業者や司会者の役割を交代することは、それぞれの立場に対する共感を深めることに役立った。また、授業者として体験した効果的な働き掛けや質問を、司会者としての立場から「授業の振り返り」に生かすことができた。

## 4 まとめ

### (1) 成果

#### ① 自分の授業に対する主体的な意識の向上

授業者は、児童の姿を中心に自分の授業を振り返ることで、自らの教材研究の在り方や授業中の児童の学びを見つめ直すことができる。他人の独断や一方的な考えの押し付けではなく、自分の授業で確かに起こっていた事実であるため、良いことも悪いことも謙虚に受け止めることができる。「授業の振り返り」の中で自分の教材研究には何が足りなかったのかと考えたり、次の授業構成や発問はこうしたいという授業改善への思いをもったりすることを通して、自分の授業に対して主

体的な意識を高めることができた。

#### ② 教師同士が学び合える雰囲気の高まり

今回の研究では、授業者と参観者が共に教材研究を行うことを目指し、指導案検討会を実施することを前提とした。共通理解をもって授業を参観しても、児童の学びについて異なった解釈がなされる場面がよく見られた。そのため、「あの児童の反応にはこういう意味もあったのか」というように、授業者として、また参観者として新たな視点に気付くことができた。授業者、司会者、参観者がそれぞれの立場から児童の学びを語ることで、多様な教材観や児童観を交流することができ、教師同士が学び合える雰囲気が高まった。

#### (3) 児童の学びを大切にす意識の深まり

「授業の振り返り」では、児童の事実が話題の中心となる。そのため授業者は、自分の授業では児童が何を学び、何を学べなかったのかということを知り、謙虚に受け止めたいと考えるようになる。司会者や参観者もまた、少しでも多くの事実を授業者に提示したいと考え、児童の学習の様子を把握しようとして心がける。児童の学びを語ることを重視した授業検討会を通して、授業者、司会者、参観者それぞれの立場から児童の学びを大切にす意識の深まりが見られた。

### (2) 課題

#### ① 児童の学びを把握する観察方法の検討

参観者が多くの児童の学びを把握するためには、観察する児童をグループに分けたり、記録用紙を作成したりするなどの工夫が求められる。より多くの情報を授業者に提供できるよう、観察方法をさらに検討する必要性を感じた。

#### ② 時間的な制約の中での話し合いの工夫

限られた時間の中で授業者にとって有益な「振り返り」にするためには、ねらいや授業者の思いに焦点を当てた話し合いも有効である。時系列で話し合いを進めることのみにはこだわらず、時間や検討内容にあった「授業の振り返り」を工夫する必要があると感じた。

仙台市立東宮城野小学校 伊藤 美穂

# 第5部

## 学校経営と実践的指導力の向上

---

---

### 第1章 小学校の取組（調査研究協力校として）

#### — 学校経営と実践的指導力の向上 —

仙台市立田子小学校

校長 堀越 清治

### 第2章 中学校の取組

#### — 学校経営と実践的指導力の向上 —

仙台市立宮城野中学校

教頭 菅原 敏彦

### 第2章 学校経営の取組

#### — 校内研究の活性化と学校経営の視点から —

仙台市立連坊小路小学校

校長 渡部 力

### 終わりに

#### — 児童生徒を「見る目」を育てる「授業の振り返り」 —

仙台市立連坊小路小学校

校長 渡部 力

---

---

◇第1章◇ 小学校の取組（調査研究協力校として）

## 学校経営と実践的指導力の向上

### 1 学校課題をふまえた学校経営

今日、教師の資質の向上が叫ばれており、学校における校内研究の役割がさらに重要となっている。教師一人一人が自己研鑽に励み、分かる授業や楽しい授業を目指し、授業力向上と授業改善を常に心がける必要がある。

本校は、県の学習状況調査の分析結果からみて、今後もさらに基礎的・基本的な内容の指導をより充実させなければならない状況にある。このような背景の中で、教科指導及び生徒指導がきちんとできる教師集団を育てていくことが急務である。

そこで、学校経営にあたり、授業研究を校内研究の中核に位置づけることは、教師の実践的指導力育成につながり、校内研究の活性化に結びつくものと考えた。そのためには、教師が日々の授業実践を公開し、自らを振り返る機会をより多くもつことが大切である。

### 2 校内研究の基本的な考え方

#### (1) 児童の学びの姿での振り返り

授業検討会において、教師の指導法に視点をあてるのではなく、児童の実際の学びの姿を具体的に追いながら、「授業の振り返り」を行う。これにより、教師が授業で必要とする力に自ら気づき、授業改善を行いながら、次の実践につなげていくことと考える。

#### (2) 校内研究の活性化

多くの教師が授業研究を日常的に行い、相互に授業を公開し同僚性をはぐくむ中で、自分の実践を振り返る機会をもつ。その中で得られた気づきをもとに、日常的に授業改善を行う体制が築かれることと考える。

### 3 校内研究体制の見直し

#### (1) 授業研究会

前年度授業研究の回数が一人1回だったものを、平成18年度はさらにその機会を増やし、相互の同僚性をはぐくむ。

#### (2) 授業検討会

今年度の授業検討会は、児童の学びの姿での「授業の振り返り」を中心とした検討会とし、授業改善に結び共通理解を図る。

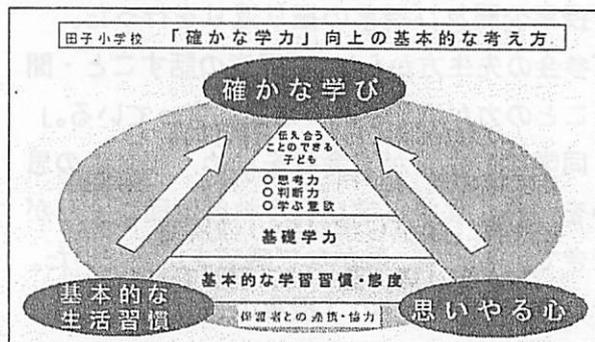
#### (3) 校内研修

大学教授、本市の国語科の指導的立場の諸先生方を招聘し、国語科の「話すこと・聞くこと」や、「授業の振り返り」を中心とした研修会を数多く設け、教師自らの資質の向上につなげる。

### 4 具体的な取組

#### (1) 学力向上推進協力校として

本校は、仙台市教育委員会より平成17・18年度の2か年、学力向上推進協力校の委嘱を受け、「自分の思いや考えをもって、豊かに表現する児童の育成」を主題とし、「『話すこと・聞くこと』の力を高める国語科の実践を通して～」を副題として、相手意識を持って話すこと・聞くことの在り方を研究の柱に、全職員で取り組んできた。



## (2) 教育センター調査研究協力校として

本校は、本年度教育センターの調査研究事業の「校内研究活性化の在り方を探る」ための協力校として全面支援をいただき、「授業の振り返り」を中心とした授業検討会の工夫改善に関する研究にかかわることができた。

また、センターの先生方の他にも、校内研修会に多くのすばらしい指導助言者をお迎えすることができた。宮城教育大学教授相澤秀夫先生、慶應義塾大学教授鹿毛雅治先生、今野英二七郷小学校長先生、今野和賀子大野田小学校教頭先生から、最新の教育情報の提供をはじめ、多くのご指導を賜った。大学教授、本市の国語科の指導的立場の諸先生方から、何度も直接に指導いただく機会を得て、職員にとり大きな自信と励みとなり、研修意欲が大いに高まった。

研修に前向きに取り組む本校の教員に、さらに研修意欲の火をつけたのは、「授業構想案」と「授業の振り返り」という新たな教育実践の流れであった。どうせやるのなら新しいそれらの手法に挑戦してみようとする教師集団の意気込みである。その結果、平成17年度は32回、18年度もすでに20数回に及ぶ日々の授業実践を積み上げている。

## 5 本校に見えている変化

### (1) 学力向上推進協力校公開研究会

10月25日、学生を含め350名を越える参会者の中で、特別支援学級を含め全学年7クラスで授業公開及び授業の振り返りを行った。ご参会の先生方からは、「児童の話すこと・聞くことの力が鍛えられ、着実に育っている。」「同学年の教員が司会者を務め、授業者の思いを共有しながら学び合う教師集団づくりができています。」等、温かなご感想をいただいた。

公開当日、七つの「授業の振り返り」のうち、四つの学年で、自校教員が司会者を務め

られたのは、1年半にわたり日々の授業実践を公開し、自らを振り返る機会を積み重ねた成果であり、本校のスタイルでもある。授業検討会に「授業の振り返り」を取り入れたことにより、一人一人のささやかな実践を囲む、建設的な同僚性のある雰囲気醸成され、校内研究にかかわる教師の意欲に向上が図られた。

### (2) 慶應義塾大学鹿毛教授の言葉から

7月、鹿毛教授を本校にお招きし、授業をご覧いただいた。「授業の振り返り」には実際にお入りいただき、その後の講演と、半日にわたってご指導の機会を得た。後日、H中学校の公開研究会で来仙されたときの、教授のもったいないお話である。

「私は、他市の先生方からは厳しいと思われる。……。田子小で言ったことは、お世辞でもなければ嘘でもない。それだけ、田子小の実践は着実な取組で、先生方の熱意が伝わってきた。7月の時の3年生の授業の振り返りはそれだけすばらしかった。今の田子小は、『学校力』がついているのは当然で、教師魂に火が付いている状態だ。ぜひ、田子小のような取組がさらに広がることを願っている。」

### (3) 学校力の高まり

本校教職員の同僚性が大いに高まったその成果は、校内研究の活性化にとどまらない。

心の教育では、一学期末の授業参観で、全校で道徳の授業に取り組んだ。参観を終えた保護者、地域の方々、教職員を対象に、「道徳公開講座」を開催できた。また、基本的な生活習慣の改善の一つとして、全校で食育の推進にも取り組み、自校給食の残食率が5%を切るまでになった。

これらは、田子小が培った学校力の一端である。

仙台市立田子小学校 堀越 清治

◇第2章◇ 中学校の取組

## 学校経営と実践的指導力の向上

### 1 これからの学校経営

様々な教育改革が進む中であって、「学校教育の成果の第一は、学力向上である」ということを確認したい。なぜなら、よい学校の基本は、教室で充実した授業が行われていることであると考えからである。

このような学校を実現していくために、これからの学校経営で大切なことは、第一に生徒の実態を把握(Research)し、それに対して具体的な方策を立て、確実に生徒の学力や学習意欲を高めていくことであると考え。

たとえば、生徒の授業への集中度が低いと判断したら、なぜ低いのか、授業のプロセスの問題なのか、生徒の学習意欲が「夜更かし」や「テレビ漬け」などの影響を受けているか、などを考察して対策を講じることが大切である。また、授業への集中力の低下は学力向上の阻害要因になることから、問題点が発見されたら、実践途上でも問題解決の手立てを講じる必要がある。

第二に、授業力向上を学校経営の基盤に据えることである。そのためには、授業を公開し、いろいろな視点から検討することが大切である。同時に、授業を見る目も高めていく必要があると考える。教員評価システムが進む中であって、特に管理職には指導力が求められる。

第三に、教員の研修の充実である。主に教育センター等で行われる外部の研修に積極的に参加できるような体制づくりと計画的な校内研修の体制づくりである。

### 2 学校経営を充実させるための方策

#### (1) 生徒の生活や学習についての実態把握

昨今、文部科学省からも「早寝、早起き、朝ご飯」というキャッチフレーズで、基本的な生活習慣と学習状況との相関が声高に言われている。このようなことから、自校の生徒の実態をつかむことは大変重要である。その実態に基づいた具体的な学校経営ビジョンを明確に示していくことが大切である。

#### (2) 学習状況調査や標準学力検査等の活用

これまで行われてきた学習状況調査や各学校で行っている標準学力検査等を活用することが大切である。ややもすると、それぞれの調査や検査がその後の学校経営に生かされていないという実態も見られるからである。

#### (3) 学校の自己評価・外部評価の活用

開かれた学校づくりを進めるには、学校評議員制度や学校の自己評価と外部評価を活用することが重要である。学校評議員制度に関しては形式的な会合にとどめることなく有効に活用しなければならない。そのためには、学校が明確な経営ビジョンを示すとともに、それに沿った学校評議員を委嘱し、その専門的な知見を学校経営に反映させるように、積極的に学校評議員制度を活用していかなければならない。

また、学校の自己評価や外部評価を生かし、教職員や保護者等の声を学校経営に反映させていくことも大切である。

#### (4) 教師に求められるカリキュラムマネジメント

きめ細かな指導を展開しようとするれば、生徒一人一人の学びを大切にしたい教材開発と指導方法の工夫が求められる。多様な思考方法を大切にする授業は、言葉では簡単に言えるが難しい側面もある。教員の研修と授業以外の職務は精選し、授業に集中できる体制を整え、個々の生徒にかかわる時間を十分に確保する必要がある。教員の知識や技術が、個人で閉じてしまうのではなくて、各教師が専門家として、全体で相互に学び合う体制が必要である。

#### (5) ネットワークを大切に

学校は、学級、教科に閉じこもる傾向がある。これからの学校は、保護者や地域の方々とともに教育を進める「連携・調整をとまなう業務」が多くなる。よい仕事を成し遂げるためには、教師がネットワーク力をもつことが大切である。

#### (6) 日常のコミュニケーションを

フォーマルな会議を精選し、日常の職員のコミュニケーションを増やしていくような雰囲気づくりが必要である。そのためには、研究主任や教科主任等がキーパーソンとなり、授業のことや生徒の学習や生活の様子などが気軽に言える職員室づくり（職員室経営といってもよいが）が大切である。そのような雰囲気づくりを、管理職が積極的に支援していくことも大切である。

### 3 学校経営の基盤に授業研究を

教員は、校内での優れた先輩や指導者との出会いを通して授業実践力を高めていくことが多い。したがって、各学校で行われている授業研究を学校経営の基盤として、生徒と共

に成長する教師を育てることが求められている。

「今、目の前の生徒にどんな力を」という生徒の事実から出発した「課題」を共通理解して、教職員が組織で実践していくことが大切である。地域が違えば、そこに生活している生徒も異なる。したがって、当然のことながら「課題」はそれぞれの学校によって異なってくる。つまり、学校によって「特色」を有せざるを得ないわけである。そのことは、「特色ある学校づくり」ということにもつながってくる。

## 4 具体的な実践を通して

### (1) 学習状況調査を踏まえて

本校では、各教科ごとに学習状況調査を踏まえ、17年度の授業改善の取組状況と18年度の取組についてをまとめた。そして、18年度の重点事項として以下のようにまとめた。

● 試行錯誤する時間（「書くこと」「読むこと」「作業」「実験」なども含めて）を、学習内容に応じて十分に確保すること。

● 「書くこと」「読むこと」「作業」「実験」「観察」などから、「どんなことが分かるか」という教師の働き掛けを積極的に行いながら生徒の学習状況をつかみ、その後の指導に生かすこと（指導と評価の一体化）。

● 生徒の「気付き」「発見」「疑問」などを生かした学習過程を大切にするとともに、言葉や文章、作品など、いろいろな方法で表現する活動を増やしていくこと。

● いろいろな法則や公式、性質などの意味理解を重視した学習活動を大切にすること。

● 学習意欲を高めるために、学習課題を日常生活と関連させたり、既習事項を活用したりする場をこれまで以上に設定すること。

● 学習内容によっては、基礎的・基本的内容を繰り返し指導すること。

● どの教科でも、グループ学習等を積極的に取り入れ、生徒同士の話し合い活動の充実に努めること。

## (2) 生徒の実態把握

本校では7月に、生徒と保護者に対して「学校生活に関するアンケート」を実施した。生徒には、「学習面での課題」「起床時刻」「就寝時刻」「朝食の摂取状況」等を、保護者には、お子さんに「身に付けさせたい力」や「学習面で臨むこと」等を聞いた。

生徒自身が課題として一番多く挙げた項目は「授業で話をしっかり聞くこと」であった。

「提出物を期限まで提出すること」「意欲的に発言すること」「ノートを工夫すること」が次に続いた。

2・3年生の少人数学習については、多くの生徒が好ましいと思っていた。授業中、発言しやすい雰囲気もあると答えている反面、学級が落ち着かないので集中できないと答えている生徒もいた。家庭での学習については、国語と社会の学習方法を教えてほしいと思っている生徒が比較的多かった。

また、保護者が身に付けさせたい力として約70%の方が、「判断し決める力」を挙げている。「読み取る力・聞き取る力」「問題を解決する力」「学ぶ意欲」も高い割合になっている。

また約90%の方が「授業で話をしっかり聞くこと」を望んでいる。そして「基礎・基本を確実に身に付けること」「分かるまで繰り返し学習すること」「分からないところを先生に聞くこと」「応用力を身に付けること」も高い割合になっている。

このような実態を踏まえ、学校としては保護者に以下のように提示した。

●現在、学校の授業では「思考力」「判断力」「表現力」などを大切にしながら学習活動を展開しているが、なお一層努力していきたい。

●生徒には「まず授業を大切にしよう」と、いろいろな場面で指導しているが、より一層授業の重要性を強調していきたい。また、授業の中でも質問しやすい雰囲気をつくりたい。

## (3) 授業研究の在り方

できるだけ多くの教科において授業研究を行うことが中学校の校内研究では大切である。また、指導案の検討や授業後の検討会では、他教科からの意見が研究を深めることにつながるが多い。そのような観点から、宮城野中学校では、9教科を3部会に分けた合同部会で授業研究会を実施している。

また、今年度は教育センターの学習指導訪問を2回要請し、以下のとおり3教科ずつ6教科の授業研究を行っている。

\* 第1回学習指導訪問 10月19日

教科名 英語、美術、技術・家庭

\* 第2回学習指導訪問 12月19日

教科名 国語、理科、音楽

この授業研究では、全教職員が授業記録をとることに重点を置き、初めて「授業の振り返り」の手法を用いた検討会となった。検討会では、各先生方が授業から感じ取ったことを付箋に記し、指導過程を拡大した用紙に貼りながら話し合いを行った。

2回の検討会から確認できたことは、以下の3点である。

- ① どの教科においても、生徒が真剣に意欲的に取り組めるような教師の積極的な働き掛けと生徒の声(つぶやきやささやきを含めて)を拾うことの重要性。
- ② 他の考えを聞いたり、作品を見たりする場面を設けて、自分の考えなどと比べ

ながらよりよいものをつくりあげていくような学び合いの場の重要性。

- ③ 学んだ知識や方法を活用して、自分なりに課題を解決し、その教科のよさを実感できるような指導過程の工夫。

(4) 「授業の振り返り」の手法を用いて今年度初めて、教育センターの指導の下、「振り返り」の手法を用いて検討会を行った。その結果、教職員からは次のような肯定的な声が聞かれた。



- ① 全員で授業記録をとりながら集中して授業を観察することができた。
- ② 拡大した指導過程の用紙に付箋を貼る検討会は、参観者がどのような視点からでも意見を言える状況が生まれる。
- ③ 生徒の反応や活動などの学びの姿に目を向けて、話し合いを行いやすい。
- ④ 授業者は、参観者の意見を聞きながら指導過程に沿った検討がなされることが多いので授業を振り返りやすい。

その反面、以下のような課題も挙げられた。

- ① 付箋が集中した部分を中心に話し合いが行われる傾向が強いので、授業者の工夫点(「思い」や「願い」など)を意識しながらの検討がなされないこともある。
- ② 作業中心の授業やグループ活動が主体の授業では、参観者の見る位置によって大きな差があるので、焦点化された話し合いができていく。
- ③ 生徒の活動が話し合いの中心となる傾向が強いので、教師のどんな指導によっ

て生徒がどのように変容していくかという、指導方法についての話し合いがなされにくい。

- ④ 生徒の変容で最も大切な部分である学習への取組や意欲の高まり(生徒のささやきやつぶやきも含めて)などに触れるような話し合いをするためには、司会者の力量によるところが多い。

このような取組からあらためて確認できたことを挙げておきたい。

- ① 全ての参観者が、授業記録(特に生徒の反応)をとりながら観察し、授業者の指導が生徒をどのように変容させているかをつかむということ。
- ② 学習過程の前半の指導が、その後(特に後半)の活動に生きているかどうかを見取ること。
- ③ その教科のよさ(学ぶことのよさ)を、実感できるように、指導過程が工夫されているかどうかを常に検討すること。

以上のようなことを「授業の振り返り」の中で意識的に取り上げ検討することで、より充実した授業検討会になるものと考えます。

また、授業中はもちろん、授業検討会の中で、教師の指導が生徒にどのような学びをもたらしているかということの検討が、まさに「指導と評価の一体化」につながっていくものと考えます。

## 5 まとめ

本校の校長が示した重点事項に「目標をもって勉強を頑張り続ける生徒」がある。学校経営の基盤は「学力向上」であることを深く肝に銘じて、教育活動の充実に努めていきたい。

仙台市立宮城野中学校 菅原 敏彦

## ◇第3章◇ 学校経営の取組

# 校内研究の活性化と学校経営の視点から

### 1 はじめに

本調査研究が、「授業の振り返り」について研究して3年になる。今年度は、研究の柱に学校経営の視点を加え、「授業の振り返り」と校内研究の活性化との関連を探ることにした。

今年度、本調査研究の協力校として取り組んでいただいた仙台市立田子小学校の実践が物語っている事実を紹介するとともに、本校（仙台市立連坊小路小学校）における新任校長の取組を述べることとする。田子小学校における実践の詳細は、第2部第1章（堤研究主任執筆）及び第5部第1章（堀越校長執筆）をお読みいただきたい。

### 2 仙台市立田子小学校の取組

#### (1) 校長の学校経営

堀越校長の学校経営を校内研究の活性化という視点で捉えるとき、大きく二つの経営理念が見えてくる。一つは、「授業の振り返り」が教師の力量形成を図り、児童たちの学力の向上につながるという学力と教師との関係である。もう一つは、学校外の教育力を取り入れて校内研究を推進していくという校内研究の在り方の二つである。

田子小学校は、平成17年度から学力向上推進協力校として、学力の向上に取り組んでいる。堀越校長は、「授業の振り返り」を用いた授業研究は、教師の力量形成につながり、その結果として児童たちの学力の向上が図られると考えた。校内研究は、「授業の振り返り」というツールを用いた授業研究を通して推進することにしたのである。学力向上推進協力校としての取組と、調査研究協力校としての

有機的に結び付けた経営方針を打ち出したのである。これが一つめの経営理念である。

「授業の振り返り」を用いた研究は、授業者自身を対象化した研究になる。学力の向上を図るためには、日々の授業を開き、教師が互いに学び合う集団となっていくことが求められる。授業者自身の省察が伴う「授業の振り返り」に大きな期待を寄せたのは、長年道徳教育の推進に取り組んでこられた堀越校長の洞察力の鋭さと驚かされるところである。

二つめの経営理念である。茅ヶ崎市立浜之郷小学校の大瀬元校長は、東京大学の佐藤学教授の「学校は内側からしか変えられないし、その内側からの改革は、外からの支えなしには持続しない」という言葉に触発され、学校改革の道を踏み出したと述べている（※1）。堀越校長の学校経営に、大瀬元校長の実践が重なって見えてくる。田子小学校の研究の歩みも、大学の先生方、教育委員会の指導主事、学校現場の先生方、そして、地域の方々など、多くの外からの支援や協力を受け、また、協同研究する方々と共に学び合ってきた実践である。

#### (2) 職員の意識変化

平成17年度から今年10月の公開研究会までの1年7か月の間に、7回ほど校内研究に参加し、田子小の先生方と一緒に学ばせていただいた。限られた期間ではあったが、校内研究が活性化され、先生方が大きく成長し続けている様子が訪問するたびに感じられた。それには大きく三つのことが考えられる。

第一に、田子小の先生方は、「授業の振り返

り」というツールに出会って、本気になって児童と向き合えたのだと考える。自分自身を振り返り、自分を変えていくことの面白さ、あるいは、願いを実現していくことの楽しさを実感しているのである。そして、何よりも児童が変わっていくことを目の当たりにできることの喜びを味わっている。

「授業の振り返り」は、自分自身を対象化した研修の場になる。自らの実践を振り返るとき、意識して習得を目指している指導技術、あるいは、教職に就くことを目指した当時の熱い教育愛、無意識の中に積み重なった特徴や癖などが顕在化してくる。授業の中で、実現できていることや実現できていないこと、見えていることや見えていないことなども、プロンプターや参観者が、児童の姿で明らかにしてくれる。授業づくりの段階で自信をもって準備したことや迷いながら臨んだ指導等の適否が、児童の姿を通して丁寧に明らかにされていくのである。

藤沢市教育文化センターで、10年もの間「授業の振り返り」(リフレクション)を通し、教育実践臨床研究に取り組んでいる目黒悟先生の言葉である。「児童の学びが自己を形づくる過程に焦点があるとすれば、大人である教師の学びは、すでに形づくられた自己の前提や価値観を問い直し、自己の枠組みを変容させていく過程に焦点を当てていく必要がある」と述べられている(※2)。まさに、田子小の先生方一人一人が経験している日々の校内研究の姿にふさわしい言葉である。

第二に、授業観の形成に国語科教育を取り上げ、教科指導に強い教師像を目指したことである。「学びながら教える」「教えながら学ぶ」ことは、教職固有の特質である。田子小の児童の実態をふまえ、「話すこと・聞くこと」に領域を特化したことにより、目指す児童の

姿が共有されていった。同じ目線で児童を見取り、同じ意識で語り合うことは、児童や同僚の教師から学び合う土壌をつくることになっていったのである。堤研究主任を中心とする研究推進部のしたたかな戦略が、もう一つの、校内研究を活性化させた理由であると考えられる。

第三に、田子小の先生方は、相互理解、協働性を大切にしているということである。「授業の振り返り」は、自己開示できなければ授業改善にも至らないし、力量形成にもつながらない。田子小においては、校内の同僚、外の教育資源からも多くのことを学び合い、学び取ろうとしている。学びに謙虚な姿が見える。

本調査研究の理論的支柱である慶應義塾大学の鹿毛雅治先生は、「対話は、『話す一聞く』ことではない。対話するものに求められるのは、『語り合う一聞き合う』という関係なのだ」と述べられている(※3)。田子小の教職員には、「語り合う一聞き合う」という関係があり、日常の校内研究でそれが実現されている。これは質の高い同僚性そのものである。田子小には、「授業の振り返り」を根底から支え合う風土が形成されたと考える。田子小の職員室に、授業者理解に基づいた学び合いが生まれ、活性化した校内研究が推進されていると考えられる。なぜなら、その教職員の姿がそのまま教室の児童たちに反映され、担任と児童、児童同士において、「語り合う一聞き合う」という関係で授業が展開されているからである。

### 3 本校における取組

#### (1) 校長の経営方針を提示

「授業の振り返り」は自己を対象化した研究である。この脈絡から学校経営を語るとき、必然、自己の経営手腕をそ上に乗せることに

なる。新任校長として取り組んできたこの9か月の取組を振り返りながら、学校経営の一端を述べることにする。私にとっても経営の振り返りである。

着任のあいさつでは、教室の授業をいつでも参観することを明言し、授業づくりを中心にした学校経営の推進を表明した。「教師は授業で勝負」を座右の銘の一つにしているが、特に大切にしている教育理念である。

学校現場では、緊急に対応しなければならない待ったなしの生徒指導上の課題もある。学校行事、学年行事でてんでこ舞いするほどに忙しいときもある。しかし、問題の発生を防ぐ積極的な生徒指導を行うことは可能であり、その具体は、生徒指導を機能化した授業の展開にある。分かる授業、自己の可能性や変容を実感する授業、級友のよさを認める授業、仲間と練り合いつくり上げる授業など、生徒指導が機能化する授業は様々である。また、児童の学びの総体がカリキュラムであると捉え、体験的な活動を通して学ぶ行事こそ教科等での学びと密接に結び付くように計画・実施されなければならない。行事が個別に計画・実施されている場合、次のような課題があると考えられる。その行事を通して実現させたい児童の姿が不明確であること、行事のねらいと教科等のねらいが関連付けられていないこと、実現させたい姿が不明確なために評価があいまいになっていること、前年度踏襲のこなす行事になっていること、評価がないがしろにされていることなどである。

授業改善を図り、よりよい授業づくりをすることで学校教育目標の実現を目指したいと考えている。着任のあいさつで、授業づくりを学校経営の中心にしていることを伝えたのである。

4月6日、第1回目の職員会議では、次の

6点を経営方針として示した。マネジメントサイクルの転換、授業で語る児童の成長、開かれた学校、特色ある学校、危機管理、組織の協力体制である。この6点は、学校課題を解決し、教育目標を具現化するための経営者としての理念を経営方針にして提示したものである。意識の転換、日々の実践、教育の動向、環境の整備、協働という経営理念は、これまでお仕えてきた校長や上司の後ろ姿、それに昨今の教育思潮に学んだものである。

図1は、授業づくりを中心にした経営方針について、職員会議で提示した資料である。

#### ■授業で語る児童の成長

：教師は授業で勝負

##### ①授業に求められる専門性

- ・教育愛（人間愛）
- ・教育観（理念の形成）
- ・教材観
- ・指導観
- ・児童理解 等

「楽しい授業」「分かる授業」

「教え合い学び合いのある授業」

「生徒指導が機能している授業」

「居場所のある教室」

「思いやりのある学級」

##### ② 児童の名前が飛び交う職員室

##### ③ 教えることは学ぶこと

：すべての要素・要件を内包している  
授業から自身の成長を振り返る

図1 第1回職員会議での指示事項の一部

#### (2) 授業公開へのあゆみ

公言どおり、各教室のドアを開けて授業観察が始まった。当初は、「今日行くよと言ってくれたらよかったのに」と言われたこともあり、とまどいを隠せない教員もいた。

5月、研究主任と副主任から、今年度の研究計画についてレクチャーを受ける。12月4

日、二日コースでセンター訪問を予定していること、初日は指導案検討会であること、年間の授業研究の回数は今後の話し合いで決めていくこと、などを確認できた。

そこで、次のお願いと指示をした。①センター訪問の二日間ともに授業を提供すること、②年度内に全学級が授業を公開できるようにすること、の二つである。また、学習状況調査については、次のような取組になるように指示を出した。①前年度結果を分析し、全教職員で傾向を把握すること、②つまずきのある内容・観点を明らかにし、各学年指導時数を重点的に配分すること、の二つである。学習状況調査の結果をふまえた本校の取組についての構想は、「学力向上のためのアプローチ」(※図2)をご覧頂きたい。これは、6月1日教職員に提示したものである(p74)。

研究主任・副主任の働き掛けが教職員に理解され、6月23日の第1回目の授業研究を皮切りに、12月までに11回の授業が公開されている。研究教科が算数科であるが、授業公開する教科については、授業者の考えを尊重することとして行っている。

ベテラン教師との面談における会話である。「後2年ですね。たくさんの業(わざ)を若い人に伝えてください。」「そう考え、図工の授業を(公開)しました。」その先生は、自身の研究課題として取り組んできた教科で、9月に授業公開をした。

水彩の美しさと不思議さに、「わーっ」と、児童たちから感嘆の声があがる授業であった。「私、授業中、説明しすぎですね」とは、授業者自身の感想である。「授業の振り返り」というツールに慣れていない本校での検討会ではあるが、自身の指導方法を自己評価し、それを職員室で話している姿は、日々の授業実践を基にした校内研究が軌道に乗ろうとする

予感を感じさせるものであった。校長として、喜びと手応えを感じた瞬間でもある。

この授業後、この学年の2クラスは、参観した授業を追試するような実践をじている。教室に掲示された絵は伸び伸びとした作品に仕上がっている。これらの児童の作品を通して、自らの指導技術の一つに、同僚の指導方法を取り入れようとしている学級担任の実践が見えてくる。

授業公開の回数を問うわけではないが、公開し、授業後の検討会を重ねるにつれて、二つの変化が現れて来つつある。一つは、授業者自身の胸の内が開示された話し合いになってきていること、もう一つは、学び合っていることを児童に反映させつつあるということである。

### (3) 児童の姿で語る授業検討会へ

授業検討会での一コマである。「先生だったらどう指導しますか」この質問は、「なぜ〇〇を取り上げ、指導しなかったのですか」という参加者の問いに対する授業者の質問である。質問に対して質問を返す状況は、建設的な話し合いになっていない場合が多い。

授業について語るときは、児童に起きている学びを理解したうえで行うことが望ましい。断片的、瞬間的に捉えた児童の状況がその子の学びのすべてではない。同時に、指示や発問が、学習指導の全体あるいは単元構想を表すものでもない。教授行為と学習活動の展開は、真剣勝負の世界である。授業の中では、児童の内面に起きていることを把握するために、経験をもとにした研ぎすまされた鑑識眼が働き、練り上げられた発問、究極の選択としての指示などが行われている。授業者は、関わっている関係の中で児童理解をし、経験に裏打ちされた予測のもとに指導をしているのである。

授業者と児童との関係は、連続の中にあるといってもよい。換言すれば、授業の話し合いは、授業者と児童との関係、授業者の単元構想と本時との関係などを理解した上で行われる必要があるということである。児童と教師の互いの掛け合いを見取り、その姿で授業を再現していく「授業の振り返り」は、授業検討会のあるべき一つの姿である。連続した関係をとらえることは、校内研究に学び合いを実現していく。

参観者の経験で授業を評価したり意味付けしたりすることは「授業の振り返り」を取り入れた初期の段階で見られる傾向である。本校でも同様の様相が見られた。授業後の検討会に、参観者の主観が飛び交う状況を克服するには、授業づくりの段階から授業者と共に考え、授業構想に関わっていくことである。

#### (4) 児童に学ぶ意識改革

児童の姿が再現される授業検討会に共通して見えてくることの一つに、授業者の驚きがあることである。「へーっ、そうだったの」とは、プロンプターや参観者によって再現された児童の姿に対する授業者の感嘆の声である。児童の活動は多様であり、そのすべては把握しきれものではない。一人一人の様々な意見や活動を集約化、類型化、あるいは比較化しながら展開しているはずの授業であっても、見とれていないことに気付くのである。児童の学習活動を記録していくことは、児童の内面に起きている思考や疑問、思考の揺れなどを読み取っていくことである。見とれていない児童の姿から児童理解が深まること、これが「授業の振り返り」がもたらす効果の一つである。

もう一つは、参観者に見えてくる変化として、教授行為に偏りのあった観察が、児童やグループを見取っていくようになるというこ

とである。本校における「授業の振り返り」での話し合いを注意深く見ていると、それぞれに参観者のこだわりで児童やグループを追いかけていることが分かる。少人数で担当している児童、前の年度担任した児童、課題に足踏みしている児童など、様々である。それは、参観者自身の日ごろの児童捉える観察力や感覚でもある。

「授業の振り返り」では、参観者それぞれの見取りが伝えられ、授業が再現されていく。参観者の見取る場面や見取った内容から、授業者自身が児童を見取る業や感覚を感じ取っていくのである。

本校における「授業の振り返り」を用いた校内研究は始まったばかりである。校内研究が児童の確かな学力に転化されていくための取組は、今ここがスタートである。「教師は授業で勝負」という学校経営の理念が、具体的に動きはじめた実感がある。同時に、校内研究が充実・継続した取組になるように、全職員で努力を重ねていくことが求められる。

#### (5) 次への意欲の喚起

授業で大切なことは、自らの課題をもって日々の実践に臨み、強い意思をもって実践を積み重ねることである。「授業の振り返り」は、授業者の特徴、能力、授業の業、教師としての資質等を問うことになる。身に付いていること、そうでないことに気付かされる話し合いになる。得られた気付きは、授業者自身を勇気付け、あるいは変革を促す本物の力となっていく。

「授業の振り返り」をした後の授業者の感想である。「今日のような話し合いであればまた（授業を）公開してもよいです。」教えることは学ぶことであり、教えるに足らざることは補うこと以外にない。授業者は、自身と真摯に向き合い、話し合いの中の気付きから学

んでいるのである。この授業者は、すでに2回授業を公開している。

授業者の意欲が喚起されることに、外からの教育力を取り入れる方法も有効である。すでに、田子小の取組に学ぶところであるが、本校ではこれまでに、兵庫教育大学の佐藤真先生にご指導をいただいた。先生は、16～17年度の本調査研究の委員であり、研究を理論的・実践的に支えてくださった方である。10月16日の校内研究は、授業をもとに、授業づくりから指導の実際を意味付けていただいた。授業者はもちろん学校にとっても大きな励みとなった。ありがたいものである。今後の予定としては、学校評議員をお願いしている仙台大学の長見真先生にも授業を提供し、ご指導をいただくことになっている。

学校に、大学の先生方などの外の教育力を取り入れることは、学校経営のビジョンそのものである。校内研究の活性化にとって校長としての先見性のある企画や判断が求められていると考える。

#### 4 変わりゆく授業者を支えるプロンプター

校内研究の活性化を判断する一方法として、日々の授業改善の状況を捉える方法がある。

「授業の振り返り」は、授業者自身の能力や課題を顕在化することになる。授業検討会での結果としてそれらを授業者に示すことは、指摘型、批評型の授業検討会でも可能である。しかし、授業者自らの意思で授業改善が図られるためには、授業者の意図を丁寧に理解し、児童に伝わっていること、児童ができていること、児童が悩んでいることなどを示した話し合いが大切である。「理屈で理解し、感情で納得する」ともいわれる。授業後の気付きは、押しつけであってはならないのである。

授業者に寄り添う授業検討会、「授業の振り返り」に大きな役割を果たすのがプロンプターである。気付きを促すことが目的であることから、授業者の意図を理解したうえで謙虚に質問し、児童の姿を提示していくことが求められていると考える。

##### ■授業者を支えるプロンプター

- (1) 授業者との信頼関係を築き、授業者が自己開示できる環境を設定する
  - 謙虚になれる状況は、具体的な児童の姿と教授行為の提示にある
- (2) 授業を再現する
  - 教授行為と学習活動から授業者の気付きを引き出す
  - ① 授業の意図
    - (願い、目標：具体的な児童の姿)
  - ② 読み取れない指導案、見取れない発言（指示、発問、評価等）について謙虚に質問
  - ③ 読み取った指導案、見取った児童の学習状況を確認
  - ④ 指導案と授業のずれ、発言の変更等を確認（特に、とっさの修正の意図について）
  - ⑤ 意味付けのずれの確認
  - ⑥ 評価（方法、場面、内容）の確認
  - ⑦ 教授法略の確認
  - ⑧ 学習方法の確認
- (3)修正を含めた今後の方針を確認する
  - ① 本時の手応え：赤裸々な実感
  - ② 次時以降の予定、構想

図2 プロンプターとして心掛けていること

「授業の振り返り」は、テクニックやハウツーものではない。しかし、これまでの3年間、「授業の振り返り」を取り入れようとした学校・教師にたくさんの質問をされている。

「プロンプターはどう進めるのですか・・・」これを一言で言えば、プロンプターの授業者に対する敬意、授業者の児童に対する専門性を明らかにすることであると考えている。図2は、これまでの実践から見いだした心掛けである。また、図3は、プロンプターを経験しながら、授業者の気付きを得るにふさわしい言葉としてたどり着いたお気に入りの表現である。もちろんこれらの言葉は、授業者の特徴によって使い分けられてくる。

- ① 精神状態はいつもどおりでしたか？
- ② 初めに、本時特に実現させたいと考えていた児童の姿についてお聞かせください。
- ③ それは先生のオリジナルですか？  
本時、先生のオリジナルは何ですか？
- ④ 児童たちの反応はいつもと変わりありませんでしたか？
- ⑤ 児童のどの状況（姿）を見て、次に展開しましたか（その指示を出しましたか）？
- ⑥ 参観された先生方で、このこと（活動）について、紹介して下さる方はおられますか？
- ⑦ 初めの指示（説明）とその後の指示（説明）に違いがあったように思います。  
変更された理由は何ですか？
- ⑧ その手だてへの反応は、予想どおりですか？
- ⑨ 授業と振り返りを終えて、今の率直なお気持ちをお聞かせください。
- ⑩ 次時の予定や方向性について、変更があればお話をください。

図3 プロンプターとしての言葉掛け

めには、通常以上の努力と熱意が必要である。

「授業の振り返り」を経験している多くの教師は、変わっていく自分を実感し、そのことに喜びを感じている。校内研究は、教師一人一人にとって、自己の可能性を実感し、児童と共に成長できるための学びの場でありたいものである。

「教育の問題は、ほとんどが教師の問題である」との批評・批判もある。社会からの厳しい意見を払拭するには、その課題によって様々に対応しなければならない。また、各学校で日々努力しているところである。

しかし、教育に関する諸問題は、その本質から解決しない限り時間と人員がいくらあっても解決するものではない。問題を根本から解決し、学校に信頼を取り戻す一番の実践は、児童が楽しく学校に登校できる環境を提供することであると考えられる。そのためには、授業改善を通して、児童の居場所を保障することである。校内研究の活性化は、児童が心身ともに安心し、楽しさを実感できる学校にしていくことを具現化する取組である。そして、「授業の振り返り」は、教師一人一人に、教育観や授業観等の観を形成しながら自立する力を付け、同僚と学び合い・高め合う職場をつくっていくものと考えている。

仙台市立連坊小路小学校 渡部 力

※1 学校を創る 大瀬敏昭著 小学館

※2 2006.3 授業の振り返りを支援する p169

藤沢市教育文化センター

※3 同上 p17

## 5 終わりに

授業を公開し、校内研究を活性化させるた

平成18年度 仙台市立連坊小路小学校 学力向上のためのアプローチ 2006.6.1

**基本的な考え方**

- 学習状況調査の結果は、連坊小路小学校で学んだ学習の結果であるという認識のもと、分析結果(課題)を共有し、一致団結して課題の解決に当たる。
- 「分かる授業」の蓄積によって学力の向上は図られるという考えに立ち、指導と評価の一体化を図り、授業改善に努める。
- 見えやすい学力、見えにくい学力双方を含めて学力ととらえる。

**方針・戦略**

- ①研究推進委員会の協議内容として学力を取り上げ、学習状況調査を分析し、対応を図る。
- ②分析・対応策を全職員で共通理解する。  
※つまずきの見られる内容及び観点を明らかにする。  
※学年ごと、その観点に関連する単元を明らかにし、指導重点単元を設定する。
- ③国語科と算数科で、標準学力テストを実施する。
- ④家庭に協力をお願いする。  
※食事や睡眠など基本的な生活習慣の確立  
※家庭学習の習慣化(宿題の実施)
- ⑤個別指導に努める。
- ⑥面談等で家庭に結果を公表する。

**分析(課題のみ)**

- 教科 A:領域別正答率, B:観点別正答率, C:解答形式別正答率  
①仙台市との比較, ②受験者平均との比較, ③期待正答率との比較  
国語では, Aで「書くこと」, Bで「書く能力」, Cで「論述式」のつまずきが見られる。これらの正答率は, ①②③においても差が認められる。特に, 「書く必要のある事柄を選択する」ことができていない状況にある。算数では, Aで「数と計算」は①と③において, Cで「論述式」は, ①においてわずかな差が認められる。理科では, 「生物とその環境」が, ①②③において差が認められる。③においては, ほとんどの問題内容に差が見られる。
- 学習意識調査  
多くの項目(56.3%)で仙台市の平均を下回る。算数の宿題量については, 差が顕著である。「授業中, 分からないことを教師にたずねる」は, 18.2%であり, ①においても格差が大きい。



**実現したい日常的な授業**

- 授業研究と授業評価
  - ①教室を公開し、互いに授業を見合い、実践的指導力の向上を目指す。
  - ②子どもの姿で授業を語る観察力を身に付ける。
  - ③自分の言葉で授業構想や授業のねらい、願い等を語る(親が見える)。
  - ④単元構想を念頭に置いた授業に努める。
  - ⑤目標の達成と妥当性を問う。
- 授業における具体的な様相
  - ①実現させたい子どもの姿が明確な授業
  - ②練り合い、学び合いのある授業
  - ③学習課題と手だてが明確な授業
  - ④子どもの言葉でつなぐ授業
  - ⑤操作や思考する時間が十分ある授業
  - ⑥思考の揺さぶりがある授業
  - ⑦興味・関心や疑問を触発する授業
  - ⑧教材に働き掛けが生まれる授業
- 指導時数等
  - ①分析結果を受け、課題のある単元・領域に指導時数を重点的に配分する。
  - ②水曜日の放課後を個別の指導時間とし、個に応じた指導を充実する。

**実現したい子どもの姿**

- 学習前の姿(学習の規律)
  - ①教科書やその他の学習用具がそろっている。
  - ②宿題等の課題が済んでいる。
- 学習中の姿
  - ①話し手に集中して聞いている。
  - ②分からないことを質問する。
  - ③自分の考えを大きな声ではっきり話す。
  - ④意見を聞いて、考えを深める。
  - ⑤異質・同質性、比較、取捨選択、補足、批評、賛同等ができる論理性がある。
- 学習後の姿
  - ①学習することが楽しいと感じる(できる楽しさ、分かる楽しさ)。
  - ②休み時間や放課後等、観察や調べ学習が主体的に行われる。
  - ③総合的な学習の時間における学習の課題、課題の追究、発表に深まりがでる。
  - ④家庭学習が習慣化する。
  - ⑤夢や目的をもって学習する(生き方や在り方を考えて学習する)。

◇おわりに◇

## 児童生徒を「見る目」を育てる「授業の振り返り」

### 1 よりよい授業づくり

教師は、よりよい授業の実現を目指し、事前の授業構想や教材研究に努めている。児童生徒の反応をイメージしながら、様々な選択肢を用意し、授業の展開を練る。児童生徒の学びに寄り添う授業になるほど、多様な思考を受け入れた複線的な学習や練り合いのある授業の展開を構想する。

また、授業中には、児童生徒の様々な学習状況や内面の把握に努め、授業を展開している。表情や発言内容、ワークシート等へ書き込まれた内容を見取りながら授業を進める。教師の内面では、児童生徒の学習活動と事前の予測とのすり合わせが行われている。教材研究や経験に基づいた形成的評価を積み重ね、授業のよし悪しを判断しているのである。

よい授業には、図1に示したような要件があるといわれる。

#### 【子どもの側面】

- 学習の規律が確立している
- 情緒的な解放や学習集団の肯定的な関わりが見られる
- 学習目標（めあて）がはっきりしている

#### 【教師側の取組】

- 活動時間を十分に確保している
- 肯定的な働き掛けがある
- 教材や場づくりを工夫している
- 学習方法の形式が多様である
- 指導性が明白である

図1 よりよい授業の要件

### 2 日常の実践に見られる一般的な課題

しかし、日常の授業は、よりよい授業を目

指しているにもかかわらず、何かしらの課題を残しているものである。教師の思惑どおりに展開しないのが授業であると言っても過言ではない。

教育実習中や新任時代、指導教官や先輩教師の「心に残るよい授業は数えるくらいしかない」という言葉に、驚きを覚えたものである。現実には、自身を振り返り、よい授業と言えるものは、十指に足るように思える。日々の授業には、図2にある課題を感じている教師は多い。授業検討会で話題になり指摘される課題は、一般的にこのような内容である。

- ① 共通に身に付けさせたい知識、表現・技能、運動を十分に学習させることができない。
- ② 能力によって、高度な内容、多様な方法や技能を学習する機会がある一方で、簡単な知識の習得や技能の学習にとどまる。
- ③ 興味本意で学習課題が設定され、単元のねらいからずれたり系統性が生かされなかったりする。
- ④ 共通課題がないため、学習集団で協力的に学習する機会が失われる。
- ⑤ 「できる、できない」ことが学習のめあてになり、学習に質的な深まりがない。
- ⑥ 学習課題が多様化し過ぎて、指導性が発揮されず、自力解決や安全面で問題が生じる。

図2 一般的な指導上の課題

教師の教授行為と児童生徒の学習活動にずれが生ずることはしばしばある。授業づくり

における予想が児童生徒の実態とかけ離れていること、友達関係のトラブルによる突発的な事情が原因になることもある。しかし、指導上の課題が、毎日、毎時間現れるようであれば、児童生徒たちが授業から離れていくことも事実である。

### 3 授業検討会に見られる傾向

では、授業における指導上の課題はどのように解決されるのであろうか。よい授業を参観する、授業を提供し指導を受ける、教材研究をする、指導案を書く、専門書を読む、講師を招へいし研修会を開催する、授業を撮影し振り返る、研究会に所属し気の置けない仲間と研修するなど、様々な方法が考えられる。

広く日常的に取り組まれているのは、校内研究における授業検討会である。公開された授業を参観し、参観者がそれぞれに授業記録をとり、授業を評価・批評し合う。共同研究として、テーマに基づいた話し合いにするため、記録の取り方を焦点化している学校もある。頻繁に研修機関や公開研究会に参加できない状況にあっては、校内の授業研究による研修が身近でより具体的な研修になる条件がそろっている。

しかし、校内における授業研究・授業検討会が、教師一人一人の力量の形成に十分に機能しているとは言い難い現状もある。力量形成につながる授業研究、授業検討会にするためには、乗り越えなければならないいくつかの課題がある。第5部第3章(p68)でもふれたように、教師集団の中に、相互に理解し、支持する風土・土壌をつくることが求められる。教室・授業を公開することに消極的な状況を克服し、教職員が互いに心を開いて考えを突き合わせる校内研究にしていくことが、最初の課題である。

通常、授業後の検討会に、多くの時間と労力が注がれている。授業づくりの段階に比べ参観者が多く、発言も様々である。この検討会のみに参加した人は、授業者の意図や願いについて、十分な理解はできない状況にある。それは、図3にある授業構造を例に取れば、参観者自身の理解や経験から判断し、授業を評価・批評する危険性をもっているということになる。そうなれば検討会は、根本からかみ合わない話し合いになる。

#### ■教材研究

(1) 教科内容としての知識・技術等  
(学ばせる内容)

- ① 科学性、文化的価値の検討
- ② 系統性、発達の価値の検討

(2) 教材の選択と解釈

- ① 科学・文化の専門的な解釈
- ② 地域的・特殊的な解釈
- ③ 教師としての専門的解釈

#### ■授業構想

(1) 子どもの予備知識等の実態把握

(2) 授業目標(学習課題)の設定  
: 教材解釈の側面から

(3) 授業展開(授業過程)の構想  
: 子ども理解の側面から

#### ■授業の展開

(1) 説明: 教材の解釈

(2) 発問・問い返し: 思考への働き掛け

(3) 指示(学習活動の組織化)  
: 行動への働き掛け

(4) 評価: 情意への働き掛け

図3 授業づくりの過程(※1)

例えば、参観者が授業展開の発問を目ざとく記録し、授業後の話し合いで質問したとする。質問の背景には必ずやその人の意見がある。授業者と質問者のやりとりを整理すれば、授

業構想の意図をくんだとは思われない意見になっていることがほとんどである。質問者の意見の専門性や論理性に感心する場合もあるが、多くは、質問者自身の経験に基づいた発言になっていることが多い。

人間関係能力を高める取組は、近年非常に多くなってきている。その根本にあるものは、相手の立場や主義主張を理解しながら自分自身の考え方を伝えることである。日本人が苦手としている、アサーティブな関係になる取組がなされている。このような課題と取組は、児童生徒の世界に限ったことではない。地域社会や職場の中にもある。学校の教員とて同じなのである。相手の考えも理解せず、「それはおかしいのではないですか」と言えば、関係性は損なわれるばかりか金言も耳に入っはいかないのである。

#### 4 行為の中の省察力の向上

学び合える教職員集団になるための授業検討会は、どのように展開されることが望ましいのであろうか。一言で表現するならば、授業者の考えや思いで授業を参観し、児童生徒の姿を提示することである。

そもそも、1 単位時間に全員の児童生徒のすべてを把握することは不可能である。授業者は、全体を把握することを意識しながらも、特定の児童生徒あるいは、決めた場面を捉えて評価しているのである。「できた」「次の活動を指示できる」「再度説明が必要である」などの判断は、判断を決定づける児童生徒や状況を確認したからである。広い視野の中に全体をおさめ、焦点化した視野の中に特定の児童生徒を位置付けている。従って、授業者の教授行為に反応した児童生徒、あるいはそうでなかった児童生徒の学習活動を記録していくこと、そして、それを検討会の席上提示す

ることは、授業者にとっては逃れることのできない事実となる。期待し、予想していた学習活動であるかもしれない、あるいは見取ることのできなかつた活動や思考であるかもしれない。いずれにしても、教師の授業構想を理解した上で提示する児童生徒の姿は、授業者の目で授業を様々な角度から再現していると言ってもよい。授業風景を撮影現場に例えれば、1 カメでの撮影であるが、参観者による授業者理解の発言は、発言した参観者分のカメラによる撮影である。そうした検討会は、4 カメ、5 カメのスタジオと化すのである。

宮城教育大学林竹二元学長は、「教師のうちにある教えたいことが、児童生徒の継続的な追究の対象に転化したときに授業が成立する」(※2)と述べている。授業は、児童生徒自身が教材に働き掛けるにふさわしい仕掛けをすることである。仕掛けを話し合う検討会にあっては、その仕掛けは授業の要素のいずれであってもよいことになる。仕掛けについて、授業者が自らの責任で内省することができる授業検討会は、授業者の主体性を促進する。

図4は、藤岡完治氏による授業設計を行う際の概念図である。詳しくは、「教育はいま」第13号(※3)をご覧頂きたい。授業を構成する各要素が相対的に独立した構造になっている。授業設計者は、それぞれの要素のどこを課題として授業を設計してもよいのである。

この考え方に基づいた話し合いは、目標の達成に特化した話し合いになることはない。仕掛けた一つ一つの要素を丁寧に見取る話し合いを可能にする。例えば、ワークシートの内容について、児童生徒の反応や行為を基に再検討することもできる。授業改善が、教師の発問や目標の達成について偏りがちな検討会とは異なり、授業を多面的に捉えた授業改善になる可能性を秘めている。繰り返しにな

るが、授業者の意図することを踏まえた学びの事実は、授業者自身の仕掛けの妥当性や有効性を判断できるからである。「授業の振り返り」は授業者自身が、自身の教育観を省察する状況をつくりだしてくれるのである。

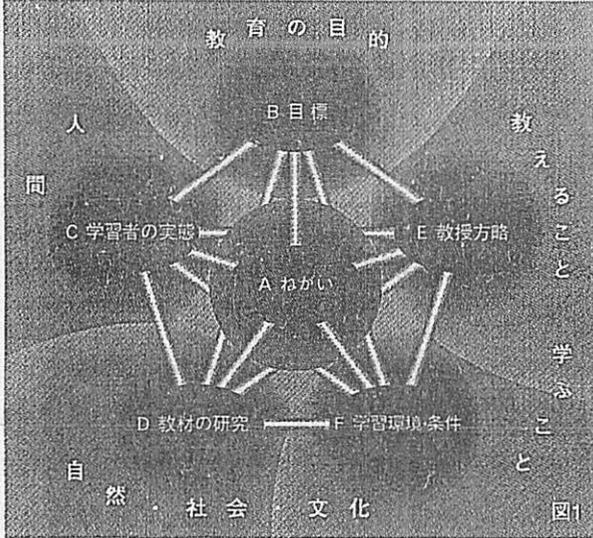


図4 授業を構成する6つの要素 (1992 藤岡完治)

### 5 「見る目」と「見取る」内容

授業者理解ができた「授業の振り返り」によって、授業者自身が自己を省察できる状況ができあがる。本単元、本時を指導するにあたっての児童生徒への思いや願い、教材研究の深さ、学習指導要領の理解、児童生徒の把握と理解、指導方法上の方略、学習環境の整備、授業の準備、授業の実際等について、自分自身を対象化して評価することになる。

自らの実践を振り返るとき、意識的に取り組んでいること、無意識に行っていること、積み重なった特徴や身に付いた癖などが顕在化していく。また、授業の中で、実現できていることや実現できていないこと、見えていることや見えていないことなど、客観的な事実として明らかになっていく。

「授業の振り返り」を経験することにより、見取る場面や見取るべき児童生徒を明確に意識するようになる。「授業の振り返り」は、授

業者の自立性を促すのである。プロンプターや参観者によって、多面的・複眼的に児童生徒の学習状況が再現され、授業者自身の見る目が磨かれ、見取る内容が豊になっていくのである。この過程はまさに、授業者の授業観を形成していることにほかならないと考える。

### 6 観の形成

校内研究をはじめとする研修の究極の目的は、質の高い自立した教師になることである。それは、教育観や授業観などの観を形成していく過程に他ならない。授業や指導、学びなどを確かな理念で捉え、その具体を自己の課題として日々の授業で実践するとき、実践的指導力の向上が図られていくのである。

- ①教師愛・人間愛：一人一人を大切にし、受容する教師
- ②居場所のある授業：分からないことやできないことから始める教師
- ③おもしろい授業：深い識見を有し、事実で問い、興味・関心を触発する教師
- ④分かる授業：学習課題を明確にし、練り合いや自力解決のための支援ができる教師
- ⑤鍛える授業：新たな能力や可能性を実感させる教師
- ⑥授業の振り返り：自身の学びに気づき、授業改善を図る教師
- ⑦同僚性：仲間と学び、高め合うことができる教師

### 観の形成

仙台市立連坊小路小学校 渡部 力

- ※1 新版現代学校教育大事典3 p546 ぎょうせい
- ※2 授業の成立 林竹二著 一葉書房
- ※3 仙台市教育センター刊行平成18年3月 p37
- ※ 学校体育授業事典 宇土正彦監修 大修館書店
- ※ 体育の授業を創る 高橋健夫編著者 大修館書店

◆引用・参考文献

- ・ 教員をめぐる現状 今後の教員養成・免許制度の在り方について 中央教育審議会答申 2006.7
- ・ 教育研究紀要 I 教育はいま 仙台市教育センター第11号 2004.3
- ・ 教育研究紀要 I 教育はいま 仙台市教育センター第12号 2005.3
- ・ 教育研究紀要 I 教育はいま 仙台市教育センター第13号 2006.3
- ・ 教育実践臨床研究 学びに立ち会う 授業研究の新しいパラダイム 藤沢市教育文化センター 2002.3
- ・ 教育実践臨床研究 授業の中で起きていることを確かめる 藤沢市教育文化センター 2003.3
- ・ 教育実践臨床研究 自分のことばで実践を語る 藤沢市教育文化センター 2004.3
- ・ 教育実践臨床研究 自分の授業に学ぶ 藤沢市教育文化センター 2005.3
- ・ 教育実践臨床研究 授業者の振り返りを支援する 藤沢市教育文化センター 2006.3
- ・ 奈須正裕 「学力向上・学習評価」研修 2004.9
- ・ 吉村敏之 「技を磨き合える学校づくり」 2006.7
- ・ 奈須正裕 「教師という仕事と授業技術」 2006.4
- ・ ぎょうせい 「新版 現代学校教育大事典」 2002.8
- ・ 林 竹二 「授業の成立」 1977.8
- ・ 宇土正彦 「学校体育授業事典」 1995.7
- ・ 高橋健夫 「体育の授業を創る」 1994.5

◆委嘱研究員

慶応義塾大学	教授 鹿毛 雅治
仙台市立連坊小路小学校	校長 渡部 力
	<委員長>
仙台市立宮城野中学校	教頭 菅原 敏彦
	<副委員長>
仙台市立田子小学校	校長 堀越 清治
	<協力校校長>
仙台市立東六番丁小学校	教諭 熊谷 裕行
仙台市立東宮城野小学校	教諭 伊藤 美穂
仙台市立市名坂小学校	教諭 千葉 春枝
仙台市立五橋中学校	教諭 登嶋 紀行
仙台市立東仙台中学校	教諭 横橋 雄市
仙台市立七北田中学校	教諭 前田 政夫
仙台市立長町中学校	教諭 菅原 壮之
仙台市立田子小学校	教諭 堤 由美
仙台市立袋原小学校	教諭 滝川真智子

◆長期研修員

仙台市立田子小学校	教諭 堤 由美
仙台市立袋原小学校	教諭 滝川真智子

◆仙台市教育センター

教科研修班	主任指導主事	板橋 誠二
	指導主事	篠原 洋治
	指導主事	渡邊 誠
	指導主事	佐藤 郷美
	指導主事	土田 茂



教育研究紀要

教育は いま

第14号

発行日 平成19年3月31日

編集・発行 仙台市教育センター

所長 吉田 利弘

所在地 〒983-0825

仙台市宮城野区鶴ヶ谷北一丁目19番1号

TEL 022-251-7440~7443

FAX 022-251-7486

Web ページ <http://www.sendai-c.ed.jp>

e-mail [info@sendai-c.ed.jp](mailto:info@sendai-c.ed.jp)

Sendai City  
Education  
Center

